阿寒町開拓記念物概要

第　1　輯

1969.11

阿寒町教育委員会

序

阿寒町が開かれたのが明治２０年、ことしで８３年の才月が流れているわけですが、今日のめざましい発展を見るとき、先人の労苦にあらためて感謝せずにはいられない。

しかし、社会が進展するにつれて、開拓当時の町史につながる重要な資料は年々失われており、従つて、これら貴重な郷土の歴史を物語る開拓記念物を後世に伝えるために、実状を把握し保存対策を講じることは極めて緊急な責務でもあつた。

町教委では、昭和３９年から調査を実施して、本町の生いたちを示す資料の収集につとめ、調査の結果の一部をここにまとめることができた。

この調査及び刊行に当り、専門的に指導と解明をいただいた釧路博物館次長沢四郎氏、市史編さん員（釧路北陽高校教諭）寺島敏治氏に厚く心から感謝の意を表わす次第です。

この集録が、町民生活の推移を知り、風俗習慣を永く後世に伝えていく上に欠くことのできないものとなれば幸いと存じます。

昭和４４年１０月

阿寒町教育委員会教育長　佐　藤　八　夫

目　次

序 …… 阿寒町教育委員会教育長　佐　藤　八　夫 ……（１）
Ⅰ　調査の概要 ……（２）
Ⅱ　農業用具 ……（３）
Ⅲ　農具以外 ……（12）
（　漁具　） ……（12）
（　林業　） ……（12）
（　大工道具　） ……（14）
（　交通運搬用具と履物　） ……（15）
（　計量器具　） ……（17）
Ⅳ　衣・食・住生活 ……（19）
（　衣生活　） ……（19）
（　食生活　） ……（19）
（　住生活・その他　） ……（23）
Ⅴ　文書・書籍関係 ……（29）
（　文書　） ……（29）
（教科書関係） ……（30）
Ⅵ　阿寒町産業史概説 ……（37）

I　調　査　の　概　要

阿寒町は、かつての辺境の地に開拓の斧が下ろされてから８０余年、多くの開拓者の努力によつて今や農業に、炭礦に、そして観光にと急速に発展をとげつつある。

それは、北国の経験をもたない彼らの苦斗の足跡とも云えるわけで、我々はその偉業を永久に町民の誇りとして、後世に伝える責任をもつと云わねばならない。

今回の一連の調査も、このような考え方を前提として、開拓の足跡を示す資料を収集し、保存して立派な郷土文化財として後世に伝えようと試みたものである。

しかし開拓当時の資料は宿命とも云えるほど次々と姿を消していく中で、収集作業も並み大低なことではなかつた。

我々が手がけた収集のための本格的な調査は、昭和４３年３月が最初だつた。ある時は、おじいさんの開拓当時の苦労話に半日も費して同情し、またある時は乞食同然にして頭を下げ、２時間余りも座りこんで１点の収集と云う１幕もあつた。この時は生活用具、農具全般にわたつて収集した。

第２次調査は４３年１１月に行ない、この時はかつて大正から昭和にかけて米づくりが盛んだつた上阿寒、仁々志別地区を重点に、その稲作用具の収集につとめた。

４４年度に入り、明治３０年富山団体として集団入殖した下舌辛地区を中心に調査をすゝめた。その結果、明治３０年代から現在まで親子三代にわたつて教科書を保存してきた石橋清治・ハル夫妻に会えて、しかもそれが新聞に大きく報道されるなど大きな収獲があつた。

以上、延１０日間にわたり農家２５戸を訪問し、戦前までの教科書も含め、約４００点収集することができた。

この調査及び本書の刊行にあたり、日曜日も返上して第一次調査から最後まで指導していただいた釧路市立郷土博物館次長　沢四郎氏には心から感謝の言葉を申しあげなければならない。特に、本書の執筆には発行日を文化祭の開拓記念物展に間に合わす目標もあり、ついに徹夜でお願いする結果となつた。その熱意にお礼の言葉もない。

さらに、釧路市史編さんという大きな仕事をもちながら第３次調査及び本書執筆に精力的に協力してくれた市史編さん員・（釧路北陽高校教諭）寺島敏治氏には厚く感謝申し上げたい。

今回の調査は、主として農業用具とその生活資料にとどめ、従つてこの報告書も第一輯とした。

調査収集すべく残された大きなものに、重要な地下資源として阿寒を支えてきた雄別炭礦、そして観光阿寒としての世界に知られてきた阿寒湖畔のそれぞれ歴史を物語る資料がある。逐次収集につとめ、第二輯として後に刊行したい。

・資料個々の記載に当つては、入殖地または現住所、寄贈者氏名、本州における出身地という方法をとつた。資料の大別、細別は便宜上そうしたまでで絶対的なものではない。解説の中で資料本来の説明からはずれて、資料所蔵者の聞き書を加えている。またその末尾の年月日は、寄贈採集年月日を付し備忘録とした。

本書の報筆は、それぞれ次のように分担した。

Ⅰ調査の概要	阿寒町教育委員会教育主事	佐藤　照雄
Ⅱ農業用具・Ⅲ農具以外・Ⅳ衣食住生活 Ⅴ文書．書籍関係	釧路市立郷土博物館次長	沢　四郎
写　真		佐藤　昭雄
Ⅵ阿寒町の産業史概説	釧路北陽高校教諭	寺島　敏治

Ⅱ　農　業　用　具

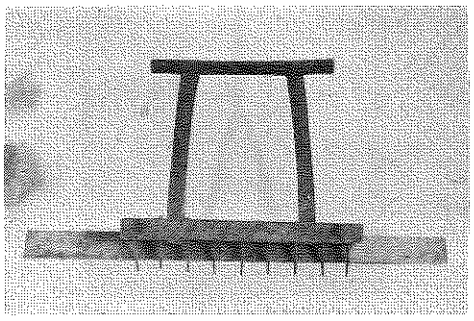
本町への移住者は、その大半が、農業を目的とした人々であつた。今回の寄贈資料の中でも農業用具が最も多かつた。普通農業用具は畑作用、水田用に分けられるが、特に水田用具が多いのが目立つた。本州で米作に親しんだ人にはこの寒い北海道に来ても、「米をつくりたい、米をたべたい」それはおさえることのできない夢であつた。本町における水稲栽培は明治４５年、城川竹次郎が桜田で耕作したのが最初といわれ、大正２年には山崎定次郎が加わつた。そして大正１２年には宮坂竹次郎がというように広まつていつた。昭和の初期に入植した加地良次氏は冷害にもめげず、現在でも水田耕作を続けている。以下水田用具から順に記載してゆくことにする。

１　馬鍬（布伏内、柴田張吉、秋田県雄勝）

田植えのとき、馬にひかせて、代かきをする用具である。馬の口取りをする人、馬鍬を押す人と２人が必要である。本州ではこれによる作業風景はいまでもみられる。

柴田氏は明治４３年に入植された。はじめ、函館湯ノ川に住み、後釧路に兄がいたので、それをつてに阿寒に入つた。この馬鍬はエゾ松を利用している。歯数は１０本、昭和４３年３月２３日採集。

２　馬鍬（上阿寒、宮坂　作、福島県）



歯数は９本、台は樫、柄はヤチダでつくられている。台のところに１４７×１０cmの板をとりつけ、泥を平にするように工夫してある。

大正12年に水田をはじめ、戦後続けたが、昭和２７．２８．２９．３１年の連続的な冷害を機に中止した。昭和４３年３月２２日採集。

３　馬鍬（上徹別、大畑勝雄）

大正７年に入植した。現在の家は昭和７年に建てたものという。歯数１１本、柄はヤチダモ製であるが台は不明。昭和４３年11月29日採集。

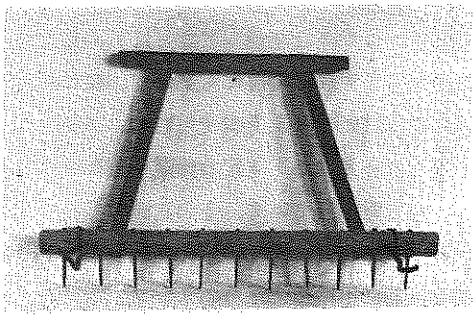
４　馬鍬（共和地区、渡辺政次郎、山梨県富士吉田）

歯数８本である。台はヤチダモである。

現在は渡辺達夫さん（明治４３年生）の代である。初代の渡辺政次郎さん（明治１９年生）は、妻もとさん（明治２３年生）を含めて、昭和４年４月に補助移民として、家族７人で入植した。水田は昭和５年からで、はじめ９年間耕作したが途中休み、戦後は昭和３８年頃までおこなつた。その面積は７反５畝である。一番とれたのが、昭和２４．５年頃で、反当６俵である。種子は農林２０号であつた。

水田は５月頃からはじめるが、種子をまくとカモに荒されるので困つたという。炭焼きをしたこともあるという。

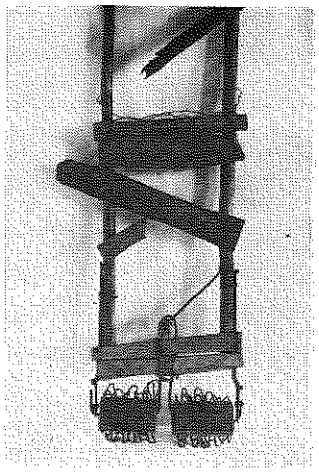
５　馬鍬（上阿寒、山崎定次郎）



水田耕作は大正２年から昭和３９年迄続けた。この馬鍬は昭和１０年頃、自分でつくつたものである。大正３年に釧路の第３学校（現東栄小）が「米のなる木」を見学に来たという。歯数11本、イタヤ製。

以上５点の馬鍬は大きさは様々である。それぞれ使用者が使い易いよう工夫してある。

６　水田除草機（下仁々志別、加地良次、愛媛県宇摩郡）

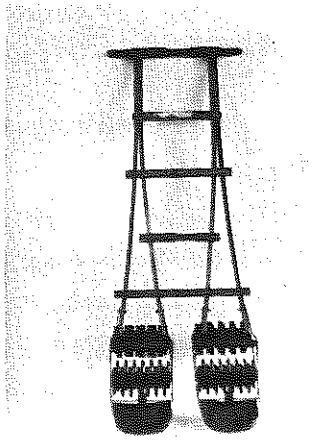


水田には雑草が生え易い。稲のすこやかな生育を願う農民にとつて、雑草は大敵である。古くは腰を曲げて手でとつたものだが、その後にこのような除草機が発明され、便利になつた。普通市販されたものを使うが、加地さんのは、それを模した自家製である。巾４６㎝、柄の長さ１１５㎝、丸い木（径9.5㎝）に針金をU字状に曲げて打ちこんだもので、苦心の程が窺われる。加地さんの水田耕作は、昭和３年に旭川から種子モミ５合を持つてきてはじめられた。何回かおとずれた冷害にもめげず、毎年耕作し、現在の作付面積は５反歩で反当４、５俵というところである。地下３尺の地温を毎年測定し、米作の資料としていて、その記録も保持されている。釧路地方、唯一の米作農家である。「ここに入植した年に植えたあのリンゴの木に花が咲くと田植えをするんじゃ。感心に季節を忘れずに花を咲かせるんじゃ」と加地さんは黙々と米作りに励げんでいるという。

７　水田除草機（上阿寒、宮坂　作）

昭和式、巾３６㎝、深川町吉沢産業株式会社製。

８　水田除草機（上阿寒、山崎定次郎）



昭和式、吉沢産業株式会社。昭和１５年頃購入した。

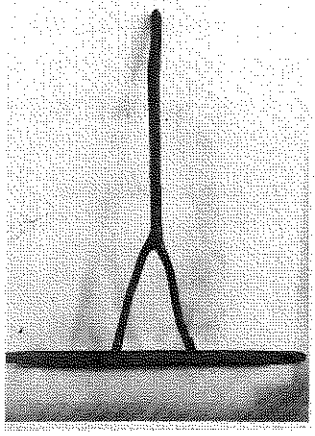
９　水田除草機（共和、渡辺政次郎）

栗沢町本田農機具工業株式会社製、巾３８㎝。

10　水田除草機（上徹別、大畑勝雄）

柄に成久の字あり、巾５３㎝、製作会社不明。

11　田ならし（共和、渡辺政次郎）



田を馬鍬でならした後、更に人力で平らにする道具。本州では柄に真竹を用いるが、ここでは、アカダモ、カラマツ、その他の手近な雑木を用いてる。９３×１０cmの板に長さ１１２cmの柄をつけている。板の厚さは２cm内外。

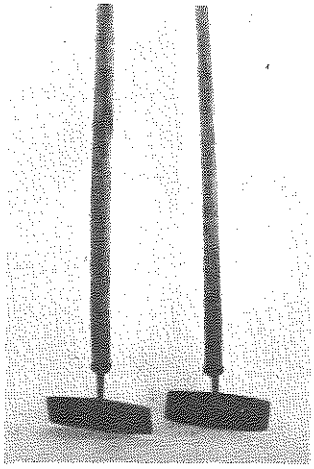
12　田ならし（上阿寒、宮坂　作）

１３７×１０cmの板に長さ１７６cm、径４cmの柄をつけている。

13　田ならし（上阿寒、宮坂　作）

板は台形を呈す。最大巾１１cm、長さ１３７cmの板に長さ１５７cm、径３cmの柄をつけている。

14　草取り器（上徹別、大畑勝雄）

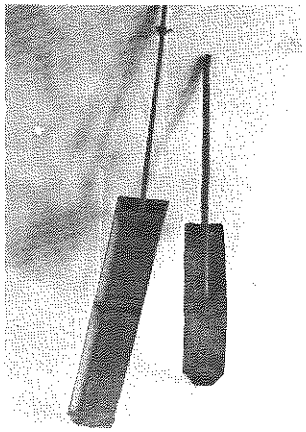


刃は鉄製、２５cm×９cmの鉄板状のものに、長さ２４０cm、径4.5cmの柄がつけられている。水田に使用したという。

15　草取り器（上徹別、大畑勝雄）

１４と同じものである。

16　舟形あみ（布伏内、柴田張吉）

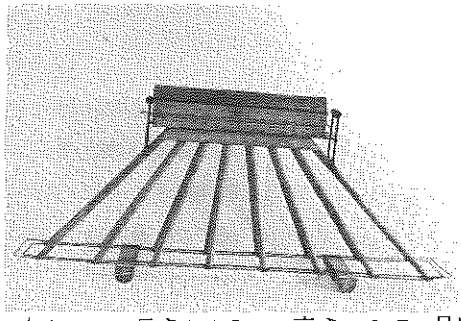


水田の泥貧虫をすくうのに使用した。柴田さんは虫取り器とよんでいる。枠はブリキと針金である。底面に目のこまかい金網が張つてある。長さ７３cm、巾１６cm、深さ5.5cm、一方に柄がついていてその長さ１１５cm、径3.4cmである。昭和４３年３月２３日採集。

17　船形あみ（上阿寒、宮坂　作）

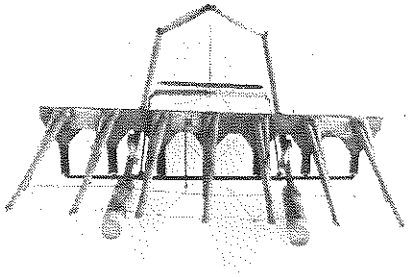
枠は木製、１０７.５cm×２３cm、深さ９cm、先端は少し細くなつている。一端に柄がつけられている。昭和４３年３月２２日採集。

18　たこあし水稲直播器（布伏内、柴田張吉）



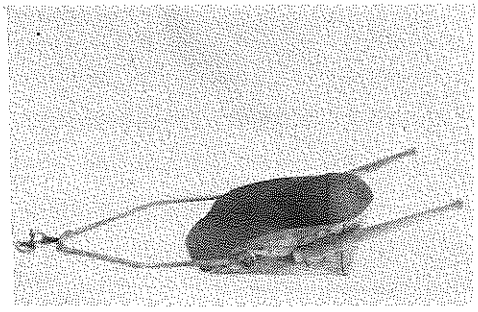
巾２７cm、長さ１７５cm、高さ７９cm、足は１６本ある。ブリキ製である。昭和４３年３月２３日採集。

19 ねこあし水稲直播器（共和地区、佐藤平吉 秋田県平鹿郡



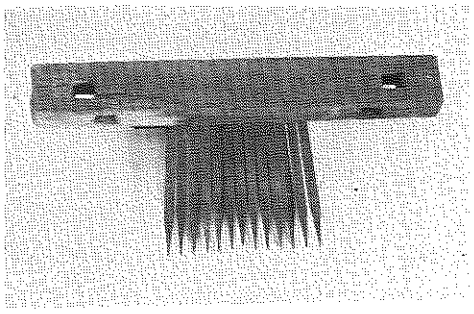
たこあしよりも足が短かく、構造にも若干違いがある。平吉氏は、大正１３年に入地した佐藤佐吉氏から数えて３代目である。巾４４cm、長さ１３７cm、２４本足、高さ６４cm。昭和43年１１月３０日採集。佐藤平吉さんは現在３代目、大正１３年に入植した。それ以前は北見の常呂にいた。水田の耕作面積は２、３反といったとこである。

20 スクレーパー（上阿寒、山崎定次郎）



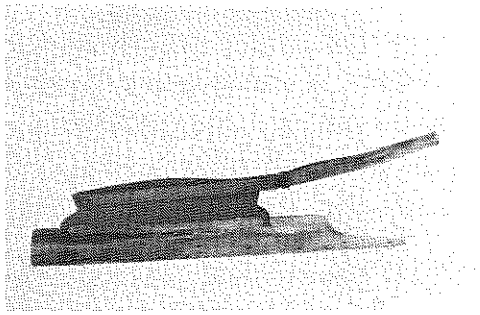
水田の泥を寄せるときに使用した。鉄製で、みのような形をしている。巾６１cm、奥行６２cm、高さ３０cmである。馬に引かせたという。昭和２年旭川からもつて来た。昭和４３年11月29日採集。

21 センバコキ（中徹別、沼田美佐男、兵庫県三原郡）



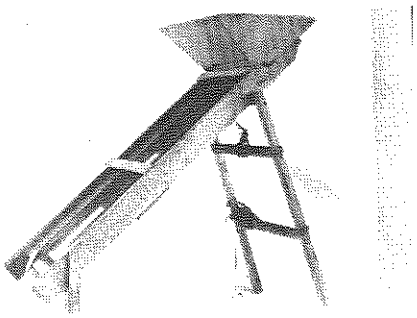
稲扱きは近世中頃まで扱箸を用いたという。竹の箸を手ではさみ、穂を引き抜き実を落す方法である。近世に大阪の船場でセンバコキが作られ、当時後家到しとよばれる程、能率をあげたという。本町では最初こうした稲扱きが用いられ、やがて足踏脱穀機が入り、そして動力脱穀機に変化したものであろう。本資料は、これまで調査した中での唯一のものである。台に60×８×５cmの角材を使用し、その中央に１３本の歯、巾23cmがつけられている。沼田さん宅は明治４３年、上舌辛に入植したが、大正５年中徹別に移つた。昭和４３年３月２３日採集。

22 押切り（下舌辛、柴木辰三郎、石川県河北郡）



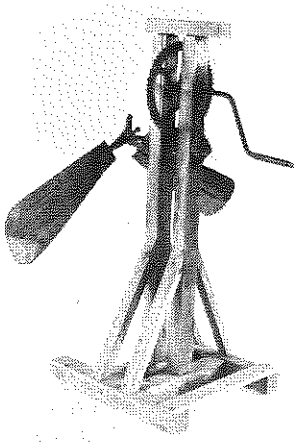
牛馬の飼料を切るための道具である。刃が山形になつている。昔はどこの農家にも一台はあつたものである。その後、手廻しの草切機に代つた。刃の巾１３.５cm、長さ４５.５cm、柄の長さ４０cmである。

23 万石（上阿寒、宮坂　作）



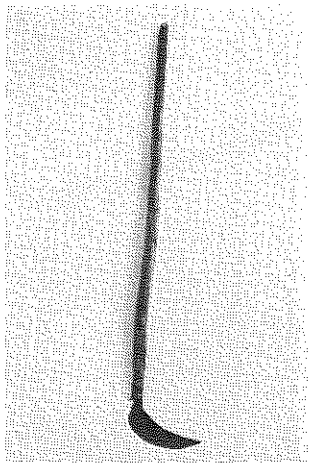
籾擂後の籾殻を除いた後、玄米と籾を選別するのに使われた。

24 手まわし扇風機（下舌辛、滝川一郎、富山県新川郡）



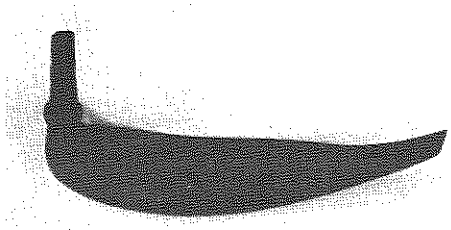
穀物の選別に使用した。最初は、むしろなどで風を起こし、選別したが、後この扇風機を使うようになつた。つい最近まで使用していた。高さ８６cmの台に３枚羽根のプロペラ（鉄製）がついている。プロペラの最大巾は１３cm、長さ３０cmである。型式、製作会社は不明。
滝川さんの父親、弥一氏は大正末から昭和の初期に、近くを流れる宇円別川をせき止め、灌漑溝をつくり、田に水をひいたが、洪水で失敗し、財産を減らしたという（滝川三郎氏談）
初代仁太郎氏は、武隅作平氏に卒えられ、富山団体として現在地に入植した。

25 草刈鎌（下仁々志別、加地良次）



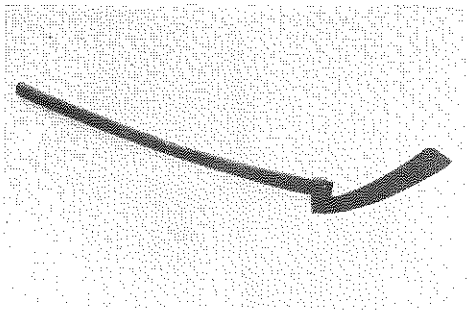
開墾地の草や笹刈りにはなくてはならない大鎌である。入植後、釧路の鍛冶屋につくらせた。刃わたり２７cm、巾８cm、柄の長さ１３２cm、材質はカラマツである。昭和４３年１１月２９日。

26 草刈鎌（徹別、佐藤光夫、宮城県二合）



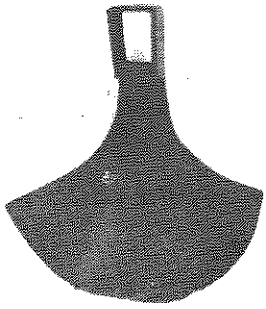
入植当時に使用した。刃わたり３３cm、巾7.5cm、柄なし。佐藤光夫氏の父親、長四郎氏は宮城団体として入植した。入植して５０年になるという。内地での生産も農家である。

27　草刈包丁？（徹別、佐藤光夫）



北海道教育庁刊の「北海道開拓記念物概要）（第一部）の図版中に帯広市の佐藤義一氏所有の類似の資料が紹介されている。それによれば「義一氏の父、佐藤道太郎の考案によるもので、明治3.2年、入植当時、故郷の長野県浅間市に注文して特別につくらせたものである」という。解説には開墾地区の草刈りに使用したとある。形状から察して、柴刈りなどに使用されたのではあるまいか。刃わたり40㎝、巾7.5㎝、柄の長さ90㎝である。阿寒町公民館の宮崎繁盛氏によれば造材用のもので、刃広の原始的なものという。柄なし。

28　島田鍬（徹別、佐藤光夫）



刃の長さ25㎝、柄なし、入植時に使用したという。

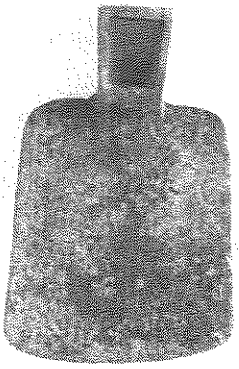
29　島田鍬（徹別、佐藤光夫）

28と同じ寸法形状ものである。

30　唐鍬（下仁々志別、加地良次）

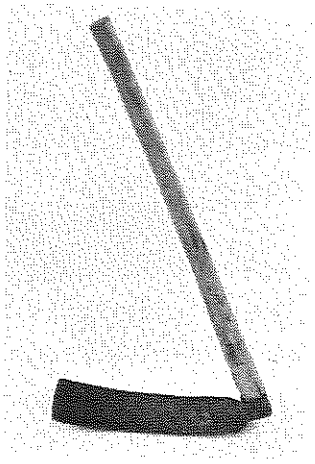
刃の巾17㎝、長さ17㎝、入植時に使用したという。

31　唐鍬（富士見町、安藤武雄、愛知県）

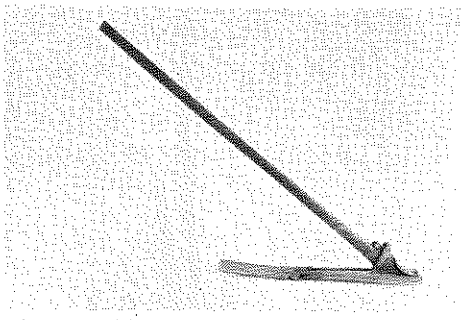


刃の巾16.5㎝、長さ18㎝、柄の長さ116㎝。入植時に使用とのことである。安藤武雄氏の先々代、利衛門氏は明治30年に入植した。町史によれば、本町最初の入植者であるという。

32　越中鍬（下舌辛、浜田幸長）

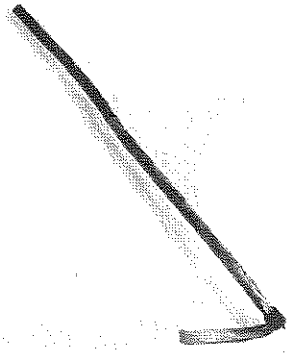


33　風呂鍬（共和、渡辺政次郎）



柄のみ木製である。入植時に山梨県から持つてきた。昭和４３年１１月２０日。

34　立鍬（中徹別、沼田美佐男）

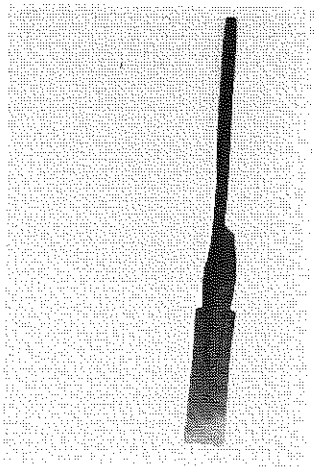


巾１３.５㎝、長さ２９㎝、柄はヤチダモ製、長さ１３２㎝。昭和４３年３月２３日採集。

35　立鍬（下舌辛、柴木辰三郎）

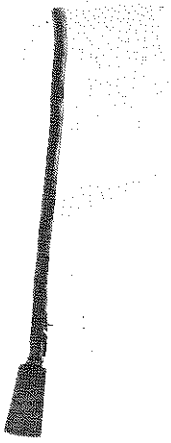
昭和に入つてからのものである。終戦直前から戦後にかけてのもので、農機具工場から大量生産されたものと思われる。柄はハンノキである。

36　鋤　（徹別、佐藤光夫）



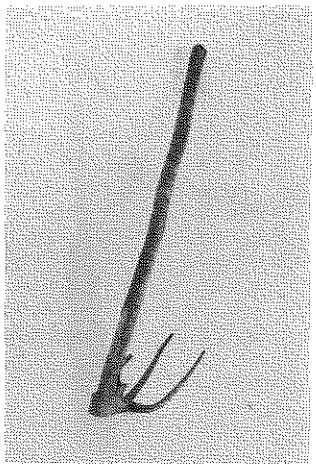
釧路地方での鋤の存在は珍らしい。釧路市立郷土博物館にかなり古い時代のもの２例があるだけだ。１例はアイヌの使用したもの、１例は道南の福山からもつてきたもの（江戸時代）である。穴を掘つたり、溝を切つたりするのに使用されたものであろう。巾１４.５㎝、長さ２８㎝、柄は自作である。材質については詳かでない。昭和４３年３月２３日。

37　長芋掘り（徹別、佐藤光夫）



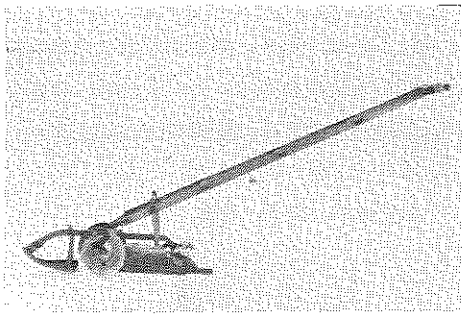
関東地方ではもつぱら、この種の道具を、ゴボウや長芋を掘るのに使用している。巾１０㎝長さ１８㎝、柄は木製、長さ９２㎝。

38 三本鍬（徹別、佐藤光夫）



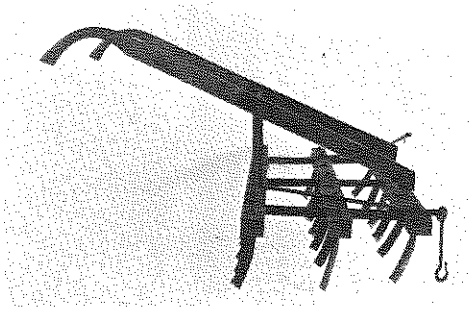
歯が3本である。柄の長さ92㎝、歯の長さ18㎝、歯と歯の間10㎝である。堆肥の積み代えや芋掘りに使用された。

39 本田式培土機（共和、渡辺政次郎）



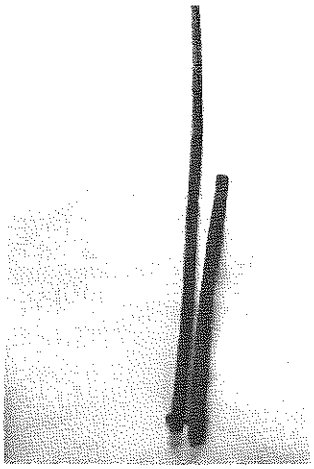
土寄せ（うねつくり）の道具、巾20㎝。

40 ハロウ（上徹別、大畑勝雄）



型式、製作会社不明、刃は3列になつている。先端の第1列6本、第2列7本、第3列10本の組合せとなつている。大畑氏は「あいかき」とよんでいる。昭和43年5月8日採集。

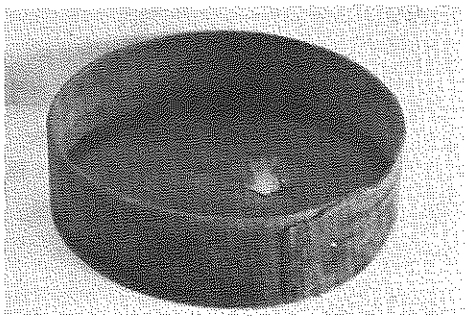
41 唐竿．豆叩き（共和、渡辺政次郎）



雑穀、豆類の脱穀に使用したもので、木製である。クルリの部分は97㎝×3×3㎝、柄の長さ160㎝である。昭和43年11月30日

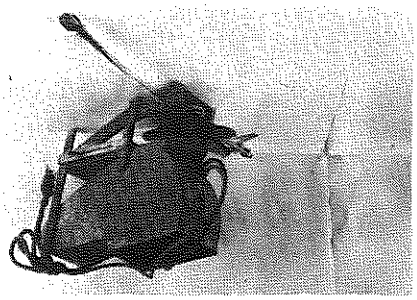
42 篩《フルイ》（下舌辛、柴木辰三郎　石川県川上郡）径32㎝、深さ3㎝。2代柴木達。昭和44年9月9日

43 篩《フルイ》（下舌辛、柴木辰三郎）



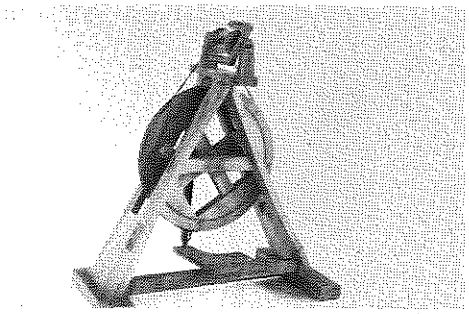
径36㎝、深さ9.5㎝。昭和44年9月9日。

44 亜麻播種機（下舌辛、尾屋勝治、富山県下新川郡）



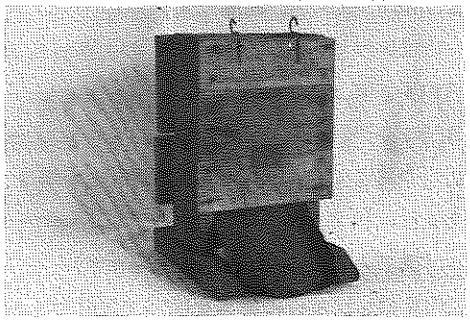
標茶に亜麻会社があつたとき、そこから購入し、播種能率をあげた。所謂バイオリン式というもので、町内各農家にみられる。戦後に使つたもので、最高4反歩もつくつたことがある。標茶の亜麻工場の廃止とともに耕作しなくなつた。

45　足踏紡毛器（下舌辛、滝川一郎）



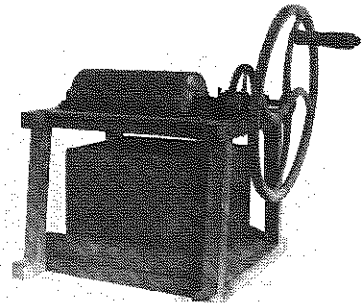
戦前から戦後にかけて、道内各農家で使用された。緬羊などの紡毛をおこなう際に使われたものである。本資料はクヌギ式A号で、十勝鹿追市街の功刀式紡毛器製作所のものである。昭和44年9月8日採集。

46　澱粉製造器（上布伏内、柴田張吉）



自作の小型品、29×16cm、高さ50cmのもので、入植後使用した。昭和43年3月22日採集。

47　澱粉製造器（上徹別、大畑勝雄）

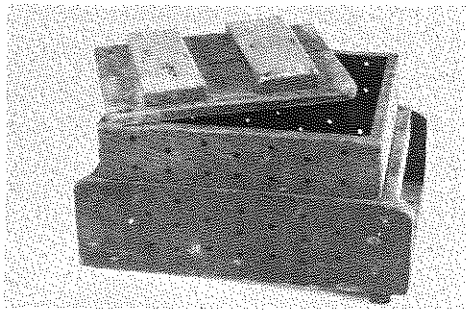


市販品、型式不明。昭和43年11月29日採集。

48　澱粉製造器（富士見町、安藤武雄）

市販品、型式不明。昭和43年11月29日採集。

49　豆腐器（富士見町、安藤武雄）



豆腐をつくるときの箱である。一つは巾30cm、深さ9cmである。自家用の豆腐つくりの箱としたものであろう。昭和43年11月29日採集。

50　澱粉砕き（富士見町、安藤武雄）

初代利右衛門が本州から持参した澱粉砕きである。鉄の篦に木製の柄がついている。これで自宅でつくつた澱粉を砕いて食べたという。昭昭43年11月29日採集。

51　プラオの刃先（下舌辛、柴木辰三郎）

52　はさみ（下舌辛、柴木辰三郎）

緬羊の毛を刈るときに使用した大形のはさみである。昭和44年9月9日。

Ⅲ　農　具　以　外

（魚　具）

本町では阿寒湖畔を中心とした淡水漁業があるが、ここにあげた資料はそうした大げさなものでなく、農家が開拓初期に使用した漁具である。点数も致って少ない。

1　ヤス（下舌辛、柴田張吉）

4本ヤスである。鮭、鱒の類をとるときに使用されたものである。巾13㎝、長さ18㎝、先端より3㎝のところにアギがつけられている。柄は折れているが、現存する長さ95㎝、経4.5㎝の雑木である。昭和43年3月22日。

2　ひつかけ（徹別、佐藤光夫）

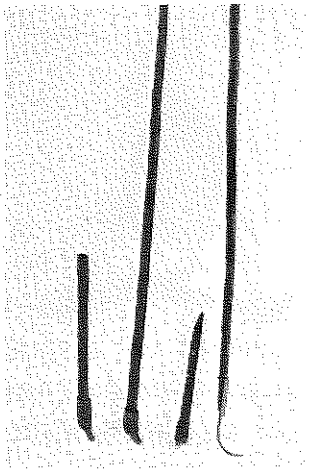
長さ20㎝柄は110㎝の長さである。

3　びく（徹別、半沢キイ）

半沢キイさんは昭和43年3月23日の調査時に87才であった。入植して40年以上になるという。びくは入植時に求めたものである。

（林　業）

1　トビクチ（徹別、佐藤光夫）



柄の長さ39㎝。造材用につかわれる。昭和43年3月23日。

2　トビクチ（徹別、佐藤光夫）

柄は折れている。造材用のものと思われる。昭和43年3月23日。

3　トビクチ（徹別、佐藤光夫）

柄の長さ119㎝である。昭和43年3月23日。

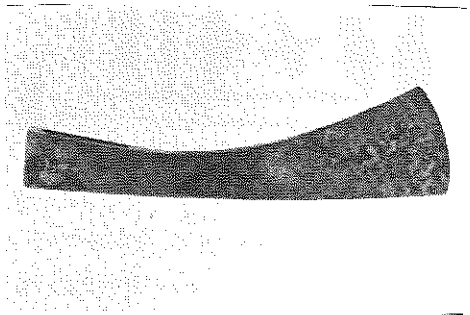
4　刃広・はびろ（徹別、佐藤光夫）

刃広は、伐木後の原木を削って角材などをつくる道具である。柄なし。昭和43年3月23日。

5　刃広・はびろ（下舌辛、柴木辰三郎）

刃わたり２２cm。

6　さつて（下舌辛、柴木辰三郎）



柄の長さ１１５cm。伐木用のまさかりである。開拓農家にとっては必需品である。昭和４４年９月９日。

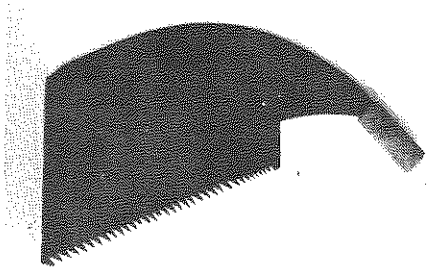
7　鉈・なた（徹別、佐藤光夫）

入植時に使用したものである。昭和４３年３月２３日。

8　木挽鋸（徹別、小瀬徳一）

伐採し木取りがすんだ後、板材にするためにこの鋸を使用する。木挽きはそれを専業にする人と、農業のかたわら木挽きをする人とがある。一人前になるのには「山小屋３年、白木屋３年」といって、山の仕事場で３年、材木屋で３年の修業が必要といわれている。木挽の道具には、鋸、くさび、墨つぼ、墨さしなどがあり、鋸には、オガ（大鋸）、テビキノコ、腰ノコ、タテビキ、ヨコビキ、二人ビキなどがある。本町で採集された鋸はタテビキとヨコビキである。開拓地の森林伐採のためには、ヨコビキが使用された。本資料はタテビキである。３０年前に家を建てるときに使った。昭和４３年３月２３日。

9　木挽鋸（上阿寒、宮坂　作）



タテビキである。タテビキは製材用に使われる。昭和４３年３月２２日。

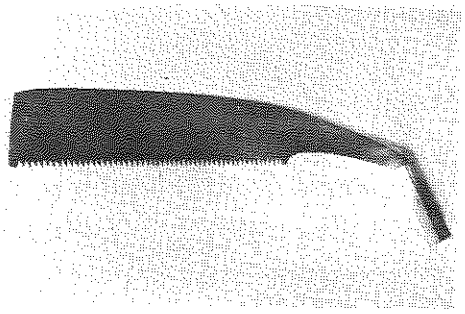
10　木挽鋸（徹別、沼田美佐夫）

タテビキである。昭和４４年９月９日。

11　木挽鋸（下舌辛、柴木辰三郎）

タテビキである。昭和４４年９月９日。

12　木挽鋸（下舌辛、柴木辰三郎）

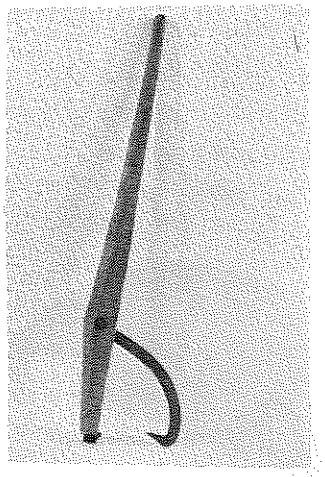


ヨコビキである。昭和４４年９月９日

13　木挽鋸（下舌辛、玉川久憲）

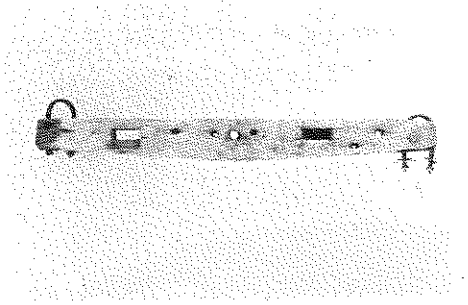
ヨコビキである。昭和４３年３月２３日。

14 がんた（下舌辛、浜田幸長）



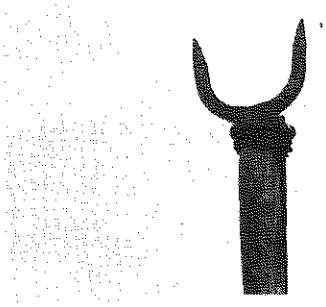
新式のものである。柄の長さ125㎝、イタヤ製。丸太を動かしたりするときに使う。木材運搬の馬車屋がよくこれを積んでいたものである。昭和44年9月9日。

15 どつこい（下舌辛、柴木辰三郎）



木材その他重いものの運搬のときに使う。ナラ材を使用している。昭和44年9月9日。

16 受けまつか（富士見町、安藤武雄）

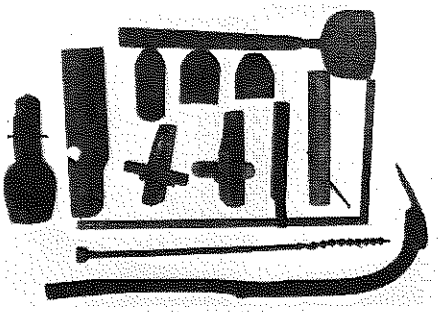


木挽用のものである。昭和43年11月28日。

（大工道具外）

大工道具は、安藤武雄氏宅の一括品である。この資料の一部については、北海道教育庁刊の「北海道開拓記念物概要」（第2部　P128）に沢登龍生氏によつて紹介されている。それには、釿（チヨウナ）、鉈の刃2枚、溝鉈、錐、竹の筆、罫引、墨つぼなどが写真で示されている。明治30年、安藤武雄氏の曾祖父、安藤利右衛門が携行したものであるという。以下資料整理の便宜上列記する。

1　釿（手　・ちような）



日本では、古墳時代があり、かなり古い歴史をもつが原郷土は大陸という。北海道では一般に「ちよんな」で通っている。柱やはり、鴨居などを平に削るときに使用する。本町の古い家にはしばしばこれに使用した柱やはりをみることができる。昭和43年11月29日。

2　ポート（穴をあける道具）

3　曲尺（いわゆる金尺、または曲金といわれるものである。）

4　溝鉈（丸）

5　〃（角）

6　両手鉈の刃

7　鉈の刃

8　鉈の刃

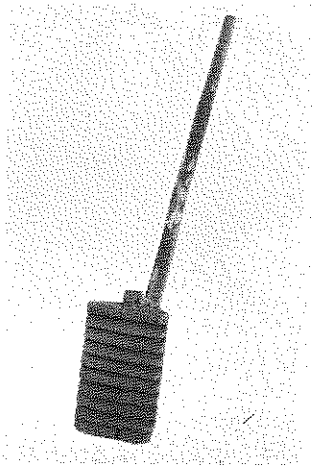
9　罫引　板を切るときに用いる。

10　罫引　〃

11　鉈

12　墨つぼ

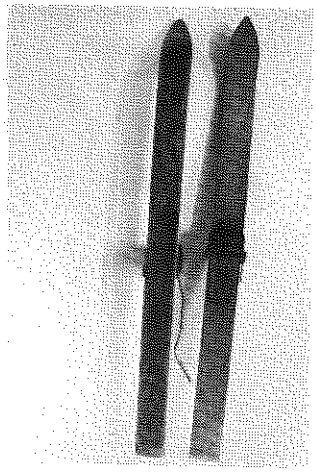
13 屋根たたき（徹別、佐藤光夫）



開拓初期の家屋の屋根は草葺きである。鶴居村、まりも国道沿いの農家などにも、草葺きの屋根の農家をよくみることができる。よく観察すると本州の出身地の面影をとどめているものもあり、興味深い。佐藤さんの家には珍らしく波形の板に柄をつけた屋根たたきが残されていた。板の大きさは２０×３０㎝であまり大きくなく、柄の長さ１００㎝である。本州では会津や信州の屋根葺き職人は有名である。釧路地方の屋根葺きのしくみを記録しておく必要があろう。こうした仕事は新築同様大変な仕事なので、１人や２人の手でできるものではない。おそらく、部落総出で行ない、内地の屋根葺きの楽しい思い出を語りあったことを推察される。

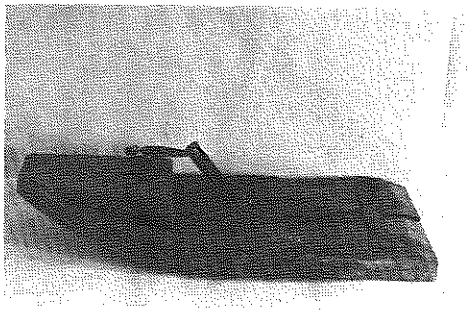
（交通運搬用具と履物）

1 スキー（上布伏内、柴田張吉）



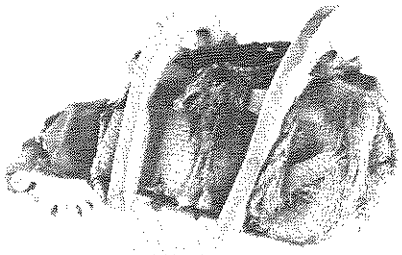
長さ１５０㎝、巾１０.５㎝、厚さ１５㎜、材質は詳かでない。裏面にアザラシの皮を張った自作のスキーである。昭和４３年３月２２日。

2 玉橇（下舌辛、石橋清治、富山県下新川郡）



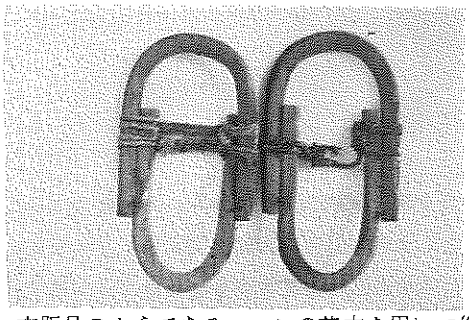
明３０年、武隅作平に伴いられて富山団体の一員として入植した。入植後間もなく、火災にあい、本州から持ってきたものはほとんど残っていない。現在の家屋は明治３９年頃に建てかえたものという。清次さんは、小学生の頃から働らき、成人してからも、造材の仕事をしたという。農業だけでは自立できなかったのである。この玉橇は明治末に作ったものである。材質はナラである。巾５４㎝、長さ５７㎝、比較的小形であるが、保存はよい。昭和４４年９月８日。

3　駄鞍（上舌辛、坂入喜間多、茨城県）



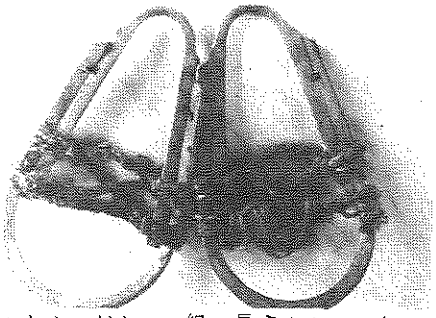
明治３６年に父弥平氏とともに１２才で入植した。最初桂恋の親類を頼って明治３５年釧路にきたが、漁師（昆布取り）は向かないので、阿寒に入植することにしたという。駄鞍は、南部の人に作ってもらったもので、明治末の頃、釧路まで出て、米２表を積んで帰った記憶がある。宿屋は西幣舞に３軒しかなく、１泊３５銭であった。（喜間多氏談）交通不便な当時にあって、荷物運搬には馬が重要な役割を果した。その馬につけたのが駄鞍である。昭和４３年３月２２日。

4　かんじき（上布伏内、柴田張作）



市販品のようである。ニレの若木を用いて作ったものである。一組、長さ５３cm、巾２９cm昭和４３年３月２２日。

5　かんじき（上布伏内、柴田張吉）



ツルウメモドキ、一組、長さ４９cm、巾２５cm、自作品である。昭和４３年３月２２日。

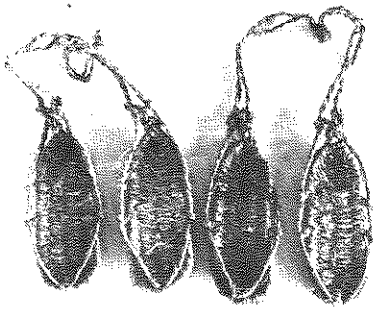
6　かんじき（上布伏内、柴田張吉）

片方だけである。市販品、長さ５２cm、最大巾２９cm。昭和４３年３月２２日。

7　かんじき（下舌辛、石橋清治）

一組、長さ６４cm、巾３４cm、ナラ材を使用している。自作の立派なものである。

8　わらじ（下舌辛、柴木辰三郎）



巾９cm、長さ２４cm、昭和４４年９月９日。

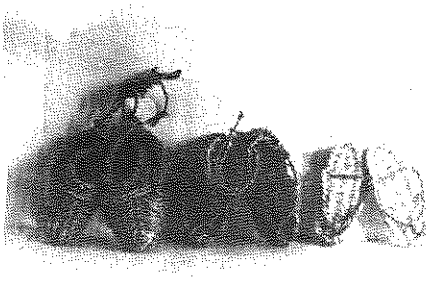
9　わらじ（下舌辛、柴木辰三郎）

巾９cm、長さ２４cm。昭和４４年９月９日。

10　わらじ（下舌辛、柴木辰三郎）

巾９cm、長さ２４cm。昭和４４年９月９日。

11　ぞうり（中徹別、沼田美佐夫）



トウキビの皮でつくったものである。巾９㎝、長さ２２㎝、自作品である。昭和４３年３月23日。

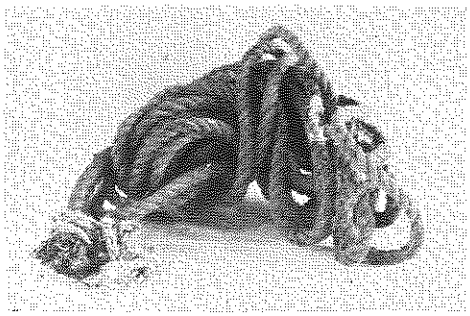
12　わらじ（中徹別、沼田美佐夫）

阿寒産のわらを使って作られたものである。巾１０㎝、長さ２５㎝。昭和４３年３月２３日。

13　つまご（中徹別、沼田美佐夫）

２５×１０.５㎝、自作品、阿寒産のわらを使用している。昭和４３年３月２３日。

14　荷縄（下舌辛、柴木辰三郎）



入植時から使用していたものである。

15　ツマゴ（下仁々志別、加地良次）

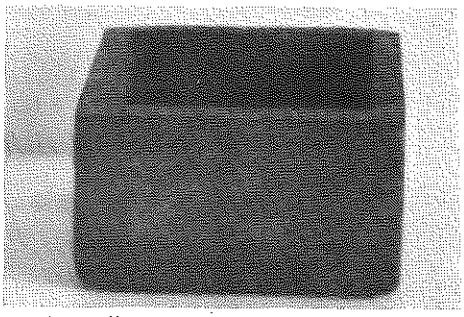
未製品、自作の稲わらを使用している。

（計量器具）

1　五合マス（上阿寒、宮坂　作）

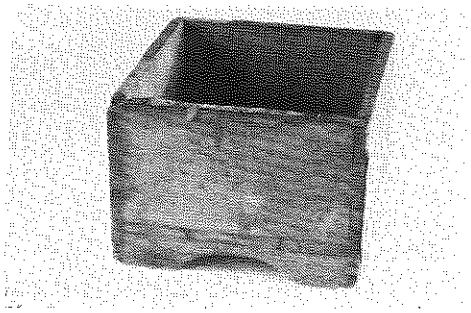
１４.２×１４.２㎝、高さ7.2㎝、函館の検印がある。明治３０年頃買い求めたものであるという。

2　二合五勺マス（徹別、佐藤光夫）



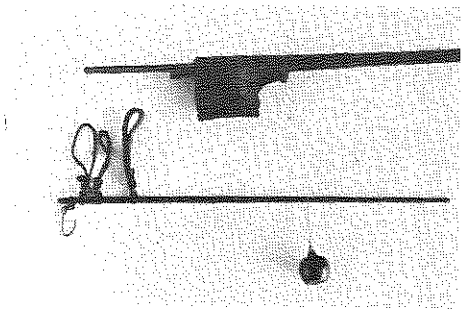
入植以後使用していたものである。

3　一斗マス（下舌辛、滝川一郎）



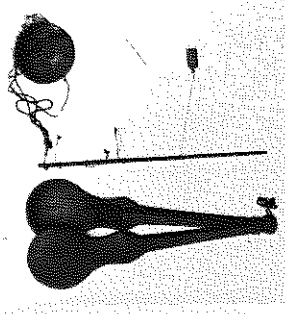
材質はトドマツである。

4　竿秤（徹別、鈴木秀清、福島県相馬郡）



商業用のものである。鈴木家伝来のものという。

5　匁秤（富士見町、安藤力次郎）



分銅、ケース付きである。砂金秤といわれているものである。昭和43年11月23日。

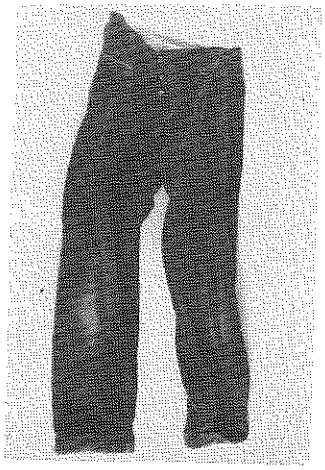
Ⅳ 衣・食・住生活

（衣生活）

入植時の衣類はほとんど残つていない。野良着、はらかけ、かたあて、トンビ、頭布、その他、もう少し期待したいところである。半天も欲しい。

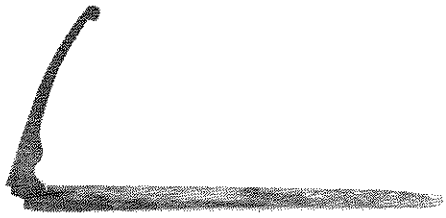
1　マント（富士見町、安藤武雄）

2　コール天のズボン（下舌辛、柴木辰三郎）



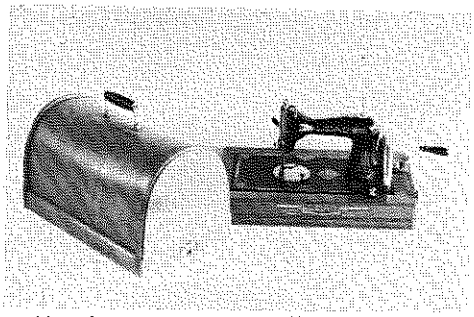
昭和44年9月9日採集。

3　くけ台（下舌辛、柴木辰三郎）

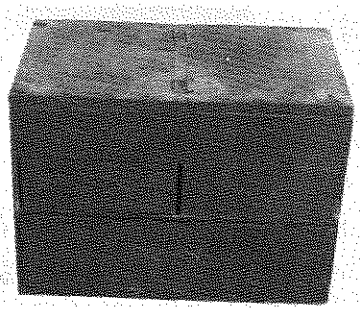


昔は一般家庭に欠かせないものであつたが、ミシンに象徴される洋裁に押されて姿を消した。昭和44年9月9日。

4　手まわしミシン（上徹別、大畑勝雄）



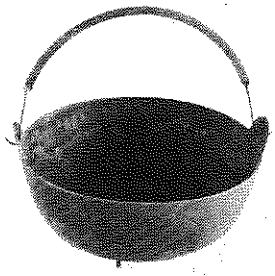
5　針箱（富士見町、安藤武雄）



（食生活）

こねばち、臼、杵、三平皿、箱膳、米櫃など、入植時に持つてきたもの、製作したもの等、まだ町内の旧家には保存されていると思われる。しかし、残念なことには、いまのところこうした資料はみつかつていない。

1　鉄鍋（下舌辛、滝川一郎）



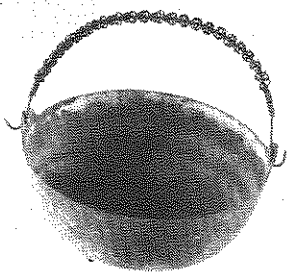
径44cm、高さ18.5cm、三本の足がついている。入植後買い求めたものである。分家の滝

川三郎さんは、こどもの頃、これでジャガイモを煮て食べたことがあるという。耳は丸く5本のつるの穴5ケがついている。昭和44年9月8日。

2　鉄鍋（下舌辛、滝川一郎）

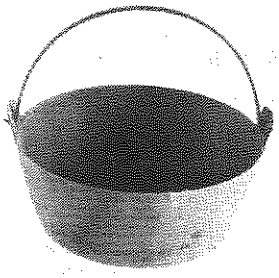
径46㎝、高さ19.5㎝、3本足である。耳は丸く、つるの穴は5本である。

3　鉄鍋（下舌辛、柴木辰三郎）



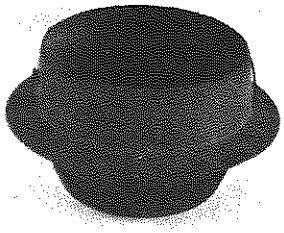
径31㎝、高さ13㎝、3本足、つるの穴は5ケ、耳は丸い。つるには銅線が巻きつけてある。昭和44年9月8日。

4　鉄鍋（下舌辛、大城宗平、富山県新川郡）



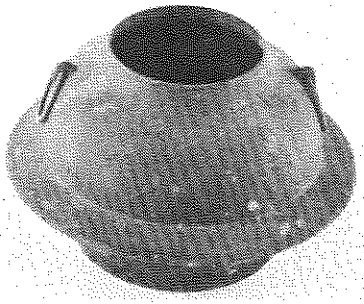
径44㎝、高さ21㎝、3本足、耳は四角である。明治31年に入植したが、戦後火災でほとんど焼失する。

5　鍔釜（下舌辛、滝川一郎）



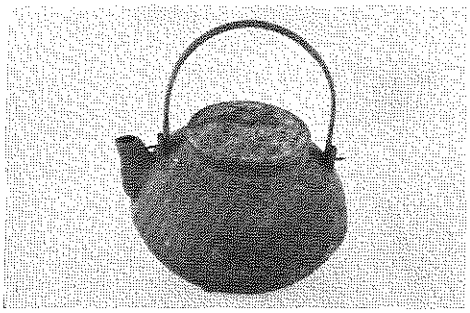
口径28.5㎝、高さ23㎝である。

6　茶釜（富士見町、安藤武雄）



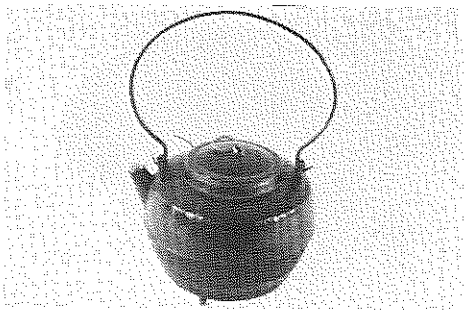
高さ13㎝、つばの径32㎝、山形のツマミのついたふた木製のふたがついている。恐らく、後でつけられたものと思われる。

7　鉄瓶（下舌辛、石橋清治）



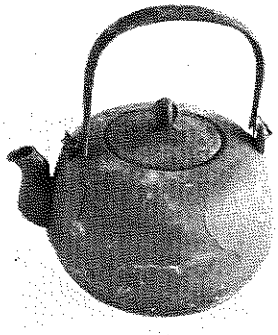
明治39年頃の火事で、内地からもつてきた品物の中で、現在残つている唯一の資料である。高さ13㎝、最大径17㎝。

8　鉄瓶（上徹別、大畑勝雄）



3本足のもので、高さ2 4㎝、径2 8㎝。

9　鉄瓶（富士見町、安藤武雄）



高さ1 8㎝、最大径2 4㎝、柿の葉の模様がついている。

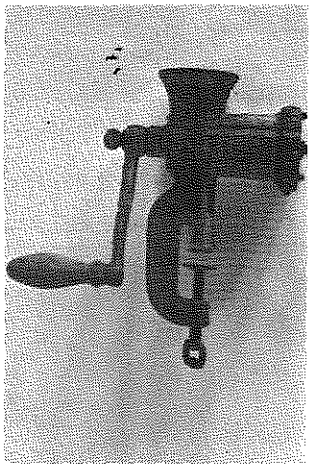
10　パン焼器（徹別、玉川久憲）

径1 0㎝、深さ0.8㎝、ハサミ状の柄がついていてその長さ4 7㎝である。鋳物。

11　石臼（下仁々志別、小瀬徳一）

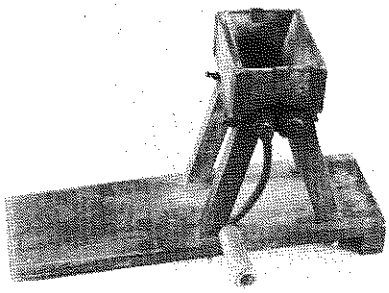
大正8年和歌山団体の一員として、初代徳三郎に伴なわれてきた。出身地は三重県入鹿村大栗須で、鍛冶屋（農鍛冶）をしていたのを見込まれて加えられたのである。石臼は、大正から戦前まで使つた。主にソバ粉をひいた。

12　ソバ切り器（下舌辛、柴木辰三郎）



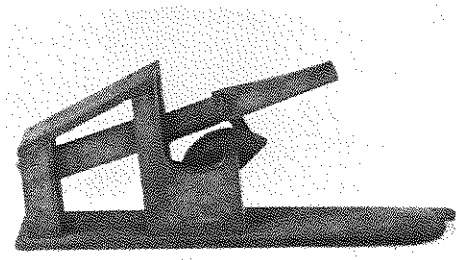
手まわしである。Mad in SWEDEN BO LINDER′5とある。

13　麦つぶし機（下舌辛、石橋清治）



栃木県氏家町㊤農具製造本社製である。阿寒信用組合時代に買つたという。麦を水につけ、適当にしめり気をもつたところで、この機械にかけ、つぶして、米飯にまぜて食べる。

14　特許薯米用剪理器（下舌辛、石橋清治）

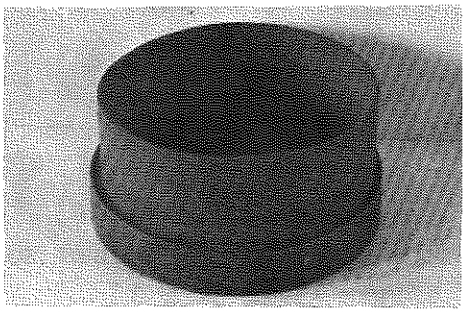


薯を米のように3㎜ぐらいに切るようになつている。右手で柄をもち、右手薯を押しつけて切るような仕掛けになつている。大正１０年代に使つたものである。若松市片柳町林製作所製。昭和４４年９月８日。

15　粉篩（下舌辛、柴木辰三郎）

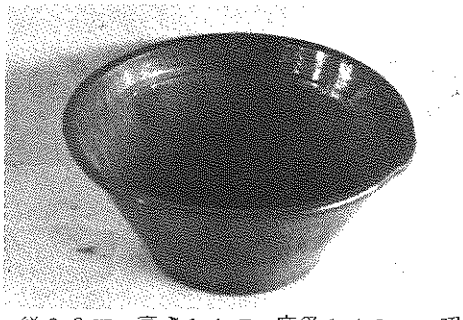
径１８.７㎝、深さ７㎝である。石臼でひいた粉を篩にかけ、より分けるときに用いる。

16　せいろう（下舌辛、柴木辰三郎）



曲物で、板製、径２８.５㎝、高さ１５㎝、すだれつき。赤飯などをふかすときに使う。

17　摺鉢・すりばち（下舌辛、柴木辰三郎）

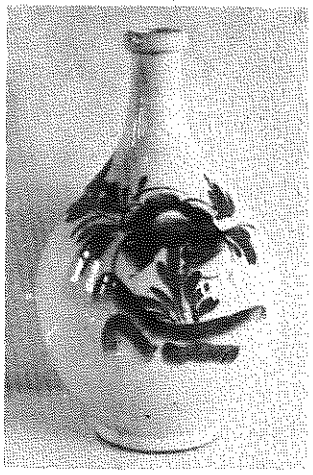


径２８㎝、高さ１４㎝、底径１４.３㎝、昭和初期のものと思われる。

18　みそこしざる（共和、渡辺達雄）

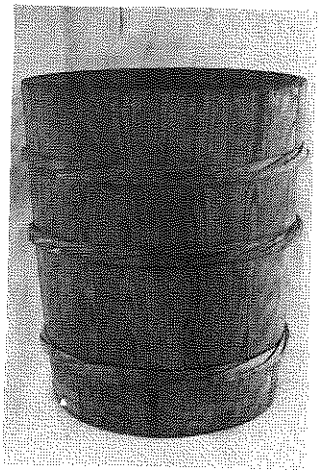
昔は、みそは自家製が多かつた。そのため、その原料である豆や麦などがつぶれないまゝ入つている場合が多く、みそこしざるは一般家庭の必需品であつた。径１２㎝、深さ１７㎝、竹製、自作品のようなでき具合で、ざるのつくり方としては雑な方である。

19　貧乏徳久利（上阿寒、山崎定次郎）



２升入りである。大正年間に旭川で購入したという。底径１１㎝、口径５㎝、高さ３３㎝。昭和４３年１１月２９日。

20　味噌桶（下舌辛、滝川一郎）

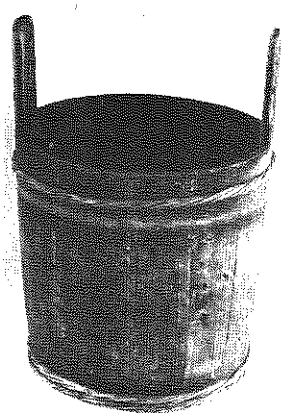


径５１.５㎝、高さ６８.５㎝、杉材である。入植するときにくにから持つてきたものである。材料は杉、４斗樽である。

21　味噌桶（下舌辛、滝川一郎）

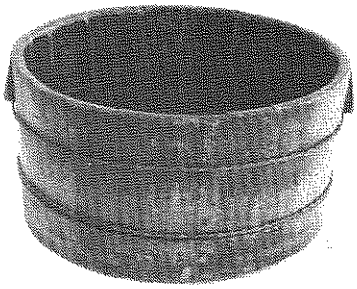
２０と同じものである。

22　手桶　（下舌辛、滝川一郎）



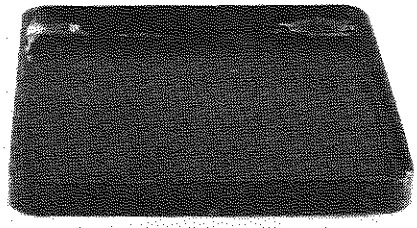
水を運ぶときに用いられた。２ケを対にして、かつぎ棒を肩にかけかついだものである。口径３５㎝、深さ３２.５㎝、材は杉である。本州から移住するときにもつてきた。昭和４４年９月９日。

23　米とぎ桶（下舌辛、滝川一郎）



径４０㎝、深さ１８㎝、把手が両側についている。たがは針金、昭和４４年９月９日。

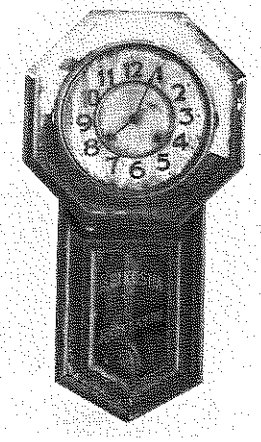
24　膳（下舌辛、滝川一郎）



３６×３６㎝、深さ３㎝、黒うるし塗り、移住の際もつてきた。

（住生活・その他）

1　柱時計（下舌辛、柴木辰三郎）



精巧舎社製である。

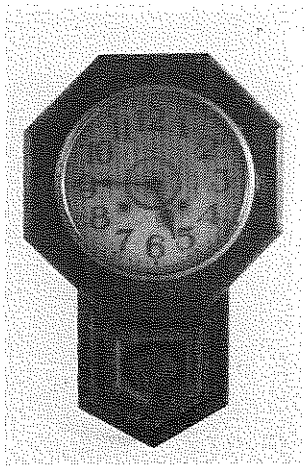
2　柱時計（共和、渡辺達雄）

大正のはじめ頃（５・６年頃）に本州で買い求め、移住の際持参した。つい最近まで使つていた。HARD　SECURITYと文字がみえる。

3　柱時計（上阿寒、山崎定次郎）

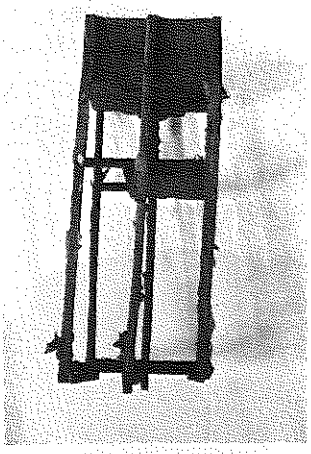
精巧社製、昭和２年４月２６日に釧路市西幣舞大通２１、早川時計店から代金８円５０銭で買い、昭和４３年まで使つていた。

4　柱時計（下仁々志別、加地良次）



名古屋愛知時計製、昭和３年移住の際５円で内地から買つてきたものである。

5　行燈（下仁々志別、加地良次）

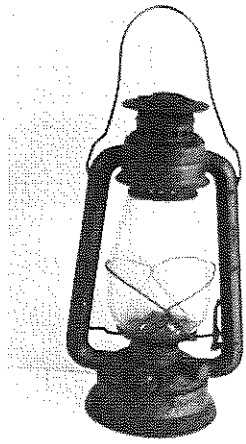


３４×２９cm、高さ９０cmで台は空箱を利用した。紙を張る部分はヤチダモである。入植時はこのアンドンを３年～１０年間ぐらい使い、後ランプとなつた。ランプは昭和２８年頃まで用いたという。昭和４３年１１月２９日。

6　ランプ（上布伏内、柴田張吉）

昭和３２年に電燈がつくまで使つていた。

7　安全ランプ（下舌辛、柴木辰三郎）



8　ランプ（下舌辛、　柴木辰三郎）

9　手持ランプ（下舌辛、柴木辰三郎）

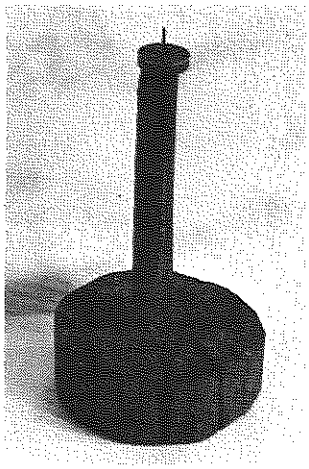
10　カーバイトランプ（上布伏内、柴田張吉）

底径１４cm、高さ２５.５cm。

11　カーバイトランプ（上布伏内、柴田張吉）

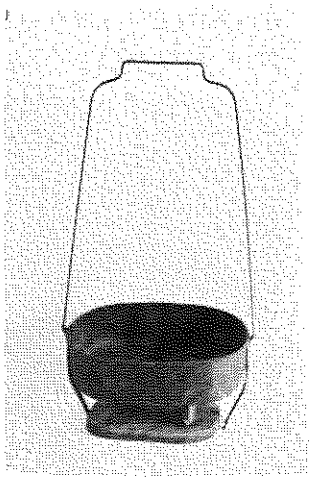
底径６.５cm、高さ２５.５cm、シンチユウ製。

12　ローソク台（上布伏内、柴田張吉）



径１８cm、厚さ８cmのハンノキを台にして高さ２６.５cm、径４cmのローソク受けをつくり、そこに釘をさしたものである。

13　炭入れ（下舌辛、柴木辰三郎）

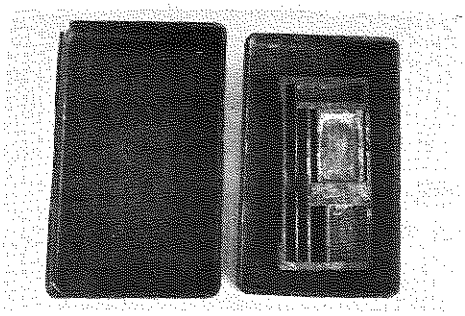


２３cm×１８cmで写真のように持ち運びできるようになつている。

14　木製いずこ（上布伏内、柴田張吉）

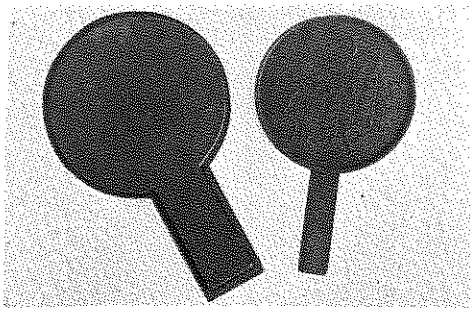
桂の板材でつくつてある。巾４１cm、長さ６３cm、高さ３８.５cm（Ｈ）２１cm（Ｌ）で、中心に４５.５cmの移状のゆれる仕掛がしてある。

15　硯箱（徹別、佐藤光夫）



入植時に持つてきたものである。

16　柄鏡（徹別、佐藤光夫）

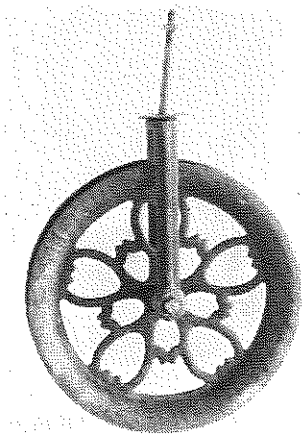


柄の長さ９cm、巾２.５cm、径１４.４cm、ツル

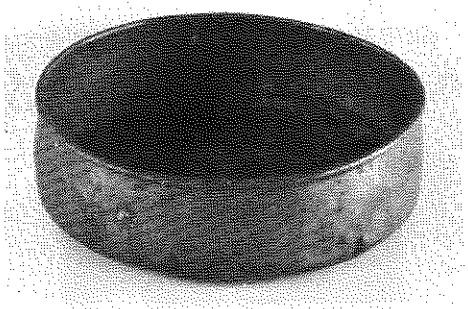
カメ、マツ、タケの絵模様あり、銘藤原光長。

17　井戸車（富士見町、安藤武雄）小、鉄製。

18　井戸車（下舌辛、柴木辰三郎）大、鉄製。



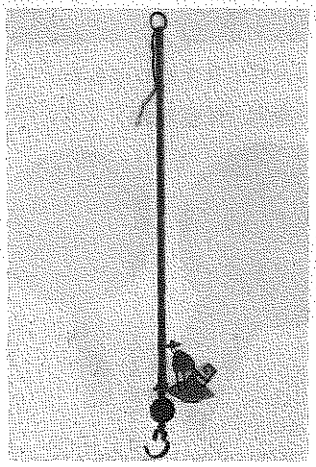
19　金だらい（下舌辛、滝川一郎）



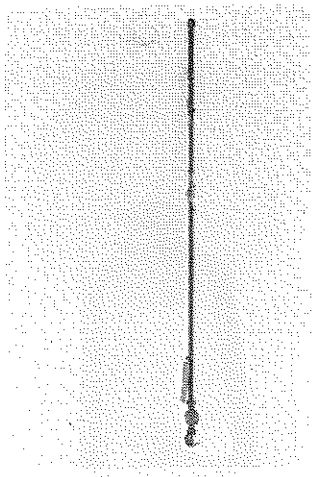
径３０㎝、深さ８㎝、袋状になつている。

銅製、移住の際持参したものである。

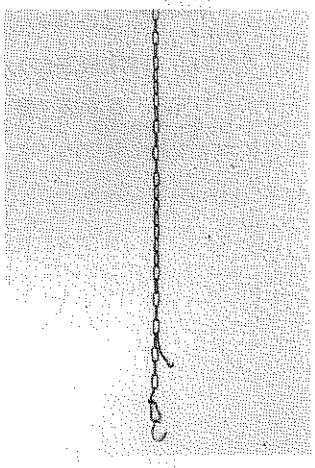
20　炉かぎ（富士見町、安藤武雄）



21　炉かぎ（富士見町、安藤武雄）

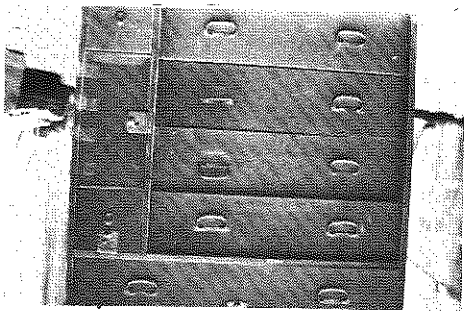


22　炉かぎ（富士見町、安藤武雄）

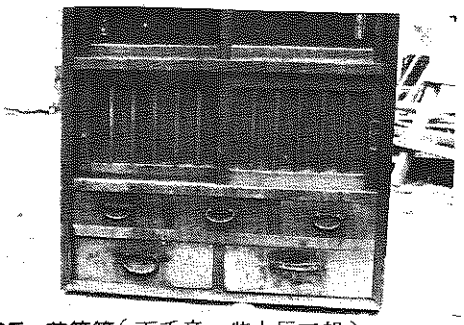


３例とも鉄製である。

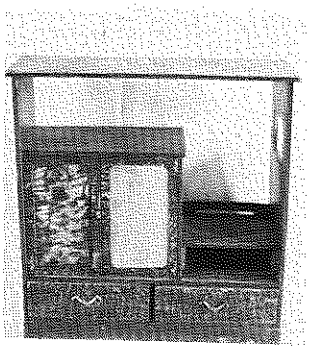
23　簞笥（富士見町、安藤武雄）



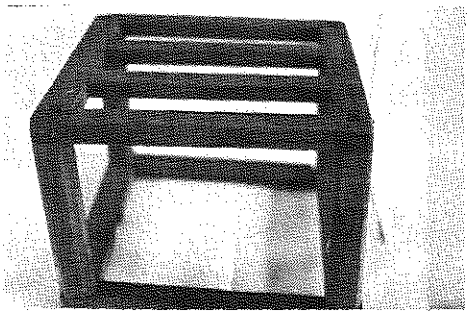
24　茶簞笥（富士見町、安藤武雄）



25　茶簞笥（下舌辛、柴木辰三郎）

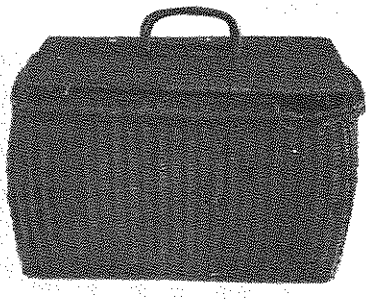


26　炬燵櫓（富士見町、安藤武雄）



47×47㎝、高さ35㎝である。

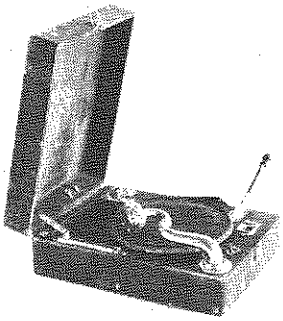
27　バスケット（下仁々志別、加地良次）



昭和3年、移住の際持つてきたものである。

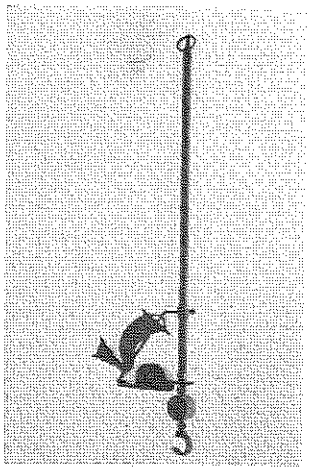
28　バスケット（下舌辛、大城宗平）

29　蓄音機（下舌辛、柴木辰三郎）



30　レコードボックス（下舌辛、柴木辰三郎）

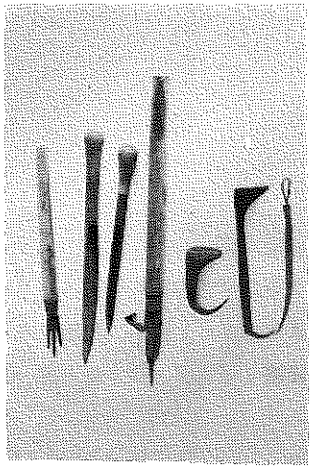
31　炉カギ（下舌辛、柴木辰三郎）



（その他）

柴木辰三郎氏の雑貨店関係の用具である。

1　検査道具



2　検査道具

3　名称不詳

4　のんこ

5　手　長

6　縄を通す道具

V 文書・書籍関係

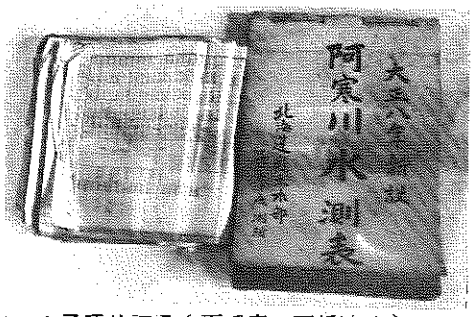
文書・書籍開係で最も多いのは教科書類である。これらの資料は将来更に増加が予想されるので、ここで件名、書名だけを記しておく。

（文書関係）

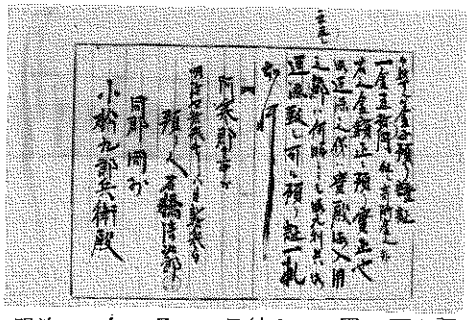
1　受領証（下舌辛、石橋清治）

2　作付段別調査の件（下舌辛、石橋清治）

3　阿寒川水測表

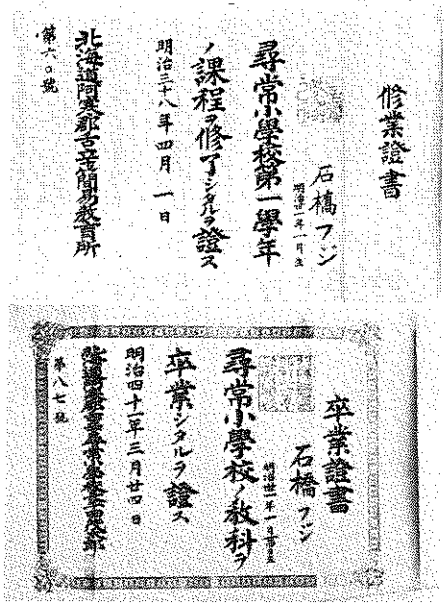


4　金子預り証書（下舌辛、石橋清治）



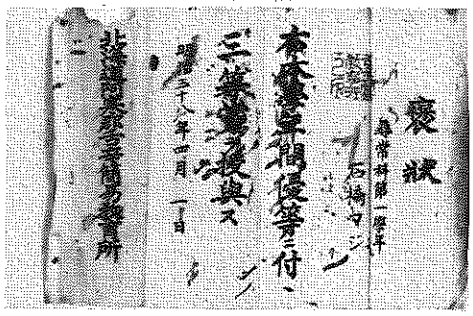
明治43年8月23日付の50円の預り証。預り人石橋清次郎、小松八郎兵衛宛のものである。

5　卒業、修業証書（下舌辛、石橋清治）



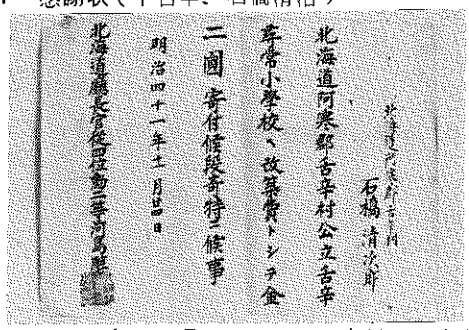
明治38年、北海道阿寒郡舌辛簡易教育所のもの。

6　褒状（下舌辛、石橋清治）



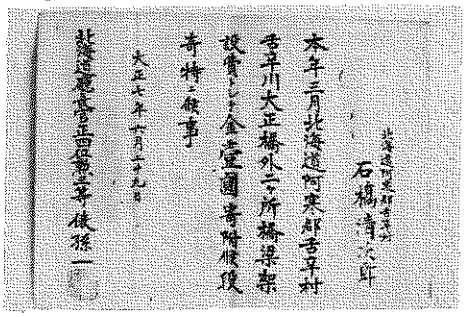
明治38年、5に同じ

7　感謝状（下舌辛、石橋清治）



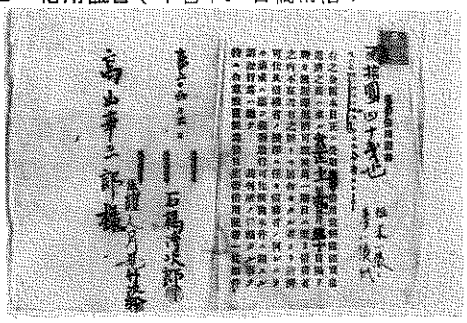
明治４１年１１月２４日付、舌辛村尋常小学校寄付金に対して道庁より。

8　感謝状（下舌辛、石橋清治）



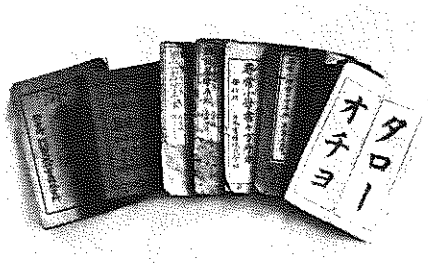
大正７年、大正橋寄付金に対して道庁より。

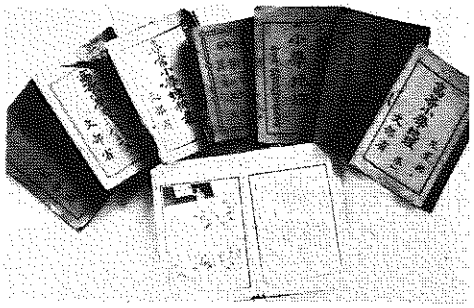
9　借用証書（下舌辛、石橋清治）



大正５年６月２日、米１俵と麦１俵の代として１０年４０銭の借用証書

（教科書関係）





（提供、石橋清治）

発行年代	書　　名	発　　行
明治　34	国語習字手本（尋常科第２学年上）	北海道教育会
〃	〃　　（尋常科第５学年下）	〃
36	尋常小学書き方手本（第４学年用上）	文　部　省
37	（第２学年用下）	〃　　２冊
38	（第２学年用上）	〃

発行年代	書　　名	発　　行
明治 38	尋常小学書き方手本（第4学年用上）	文部省
39	〃　（第1学年用）	〃
38	高等小学算術書（第4学年児童用）	〃
〃	小学日本歴史　三	〃
41	小学地理（新制高等小学校第3学年用）	〃
〃	高等小学読本（新制第3学年用上）	〃
42	高等小学地理巻1（児童用）	〃
〃	尋常小学修身書　巻1〃	〃
〃	高等小学算術書（新制第3学年用）	〃
43	尋常小学算術書（第4学年児童用）	〃
〃	〃　（第5学年児童用）	〃
〃	尋常小学書き方手本（第2学年上乙種～学年下乙種）14冊	〃
44	高等小学算術書（第2学年用）	〃
〃	尋常小学理科書（第6学年用）	〃
〃	高等小学日本歴史　巻1	〃
〃	尋常小学修身書　巻6	〃
43	高等小学八学科表解（第2学年前期）	〃
44	〃　〃（第2学年後期）	〃
大正　元	尋常小学算術書（第4学年用）	〃
〃	〃　（第5学年用）	〃
〃	〃　（第6学年用）	〃
〃	尋常小学日本歴史　巻1	
〃	〃　巻2　2冊	
2	学生日記（第5学年）	
〃	民事訴訟法問題義解	普文学会
〃	尋常小学修身書　巻5	
〃	尋常小学読本　巻9	
3	〃　巻11	
4	〃　巻10	
〃	〃　巻12	
〃	〃　巻8	
〃	尋常小学修身書（第3・4年用乙）	
6	北海道農業教科書　巻2	北海道教育会
7	尋常小学修身書　巻1	

発行年代	書　　名	発　　行
大正　7	尋常小学理科書（第5学年用）	2冊
〃	〃　国語読本　巻2	
8	〃　算術書（第3学年用）	
〃	〃　地理書　　巻2	
〃	〃　理科書（第6学年用）	
9	〃　算術書（第5学年）	2冊
10	〃　修身書　　巻5	
〃	〃　算術書（第6学年用）	
大正2～12	尋常小学書き方手本（第1学年～第6学年）	17冊
12	尋常小学国語読本　巻11	
〃	〃　修身書　　巻　6	
〃	〃　国語読本　巻12	
13	〃　理科書（第6学年用）	
15	〃　国語読本　巻　2	
〃	〃　　〃　　巻　5	
〃	〃　算術書（第3学年用）	2冊
昭和　2	〃　算術書　第4学年　3冊	文　部　省
〃	高等小学国　史　上巻	〃
〃	尋常小学修身書　巻2・3・4	〃
3	〃　算術書　第1学年	〃
〃	〃　国語読本　巻3・4・8	〃
4	〃　国語読本　巻10	〃
5	〃　修身書　巻3・5	〃
〃	高等小学修身書　巻1	〃
6	尋常小学修身書　巻6	〃
〃	〃　算術書　第5学年	〃
〃	〃　国語読本　巻12	〃
〃	〃　理科書　第6学年	〃
〃	〃　地理書　　巻1	〃
7	〃　算術書　第6学年	〃
〃	高等小学理科書　第1学年　2冊	〃
8	〃　北海道農業書　巻2	〃
〃	尋常小学国語読本　巻8	〃
〃	小学書方手本　第1学年	〃

発行年代	書　　名	発　　行
昭和　8	高等小学国語書き方手本　第1学年	文　部　省
9	小学書き方手本　第2学年上・下	〃
10	高等小学理科書　第2学年　2冊	〃
〃	尋常小学修身書　巻2　2冊	〃
〃	〃　算術書　第5学年	〃
〃	〃　理科書　第5学年	〃
〃	〃　国語読本　巻9・11	〃
〃	小学書方手本　第3学年	〃
11	尋常小学算術書　第2学年上	〃
〃	〃　理科書　第5学年	〃
〃	小学書方手本　第4学年上・下　5冊	〃
〃	尋常小学国史　下巻	〃
12	〃　国語読本　巻12	〃
〃	〃　算術書　第5学年・第6学年	〃
〃	〃　修身書　巻4	〃
〃	高等学校国史　上巻	〃
13	尋常小学地理書　巻1	〃
〃	〃　修身書　巻5	〃
〃	〃　理科書　第6学年	〃
〃	小学国語読本　巻10	〃
〃	小学書方手本　第6学年下	〃
14	尋常小学理科書　第6学年	〃
〃	〃　国　史　下巻	〃
〃	〃　修身書　巻3・4	〃
〃	〃　地理書　巻2	〃
〃	高等小学国史　下巻	〃
〃	小学国語読本　巻11	〃
15	尋常小学算術書　第6学年上	〃
〃	〃　地理書　巻1	〃
〃	小学国語読本　巻8	〃
〃	北海道小学読本　高等1年　下巻	〃
〃	北海道小学読本	〃
〃	高等小学国史　上巻	〃
〃	〃　修身書　巻1・2	〃

発行年代	書　　名	発　　行
昭和　15.	高等小学読本巻2、4（農林用）	文　部　省
〃	尋常小学地理書附図	〃
〃	高等小学　〃	〃
16	〃　地理書　巻2	〃
〃	小学農業書 巻1（男子用）2冊	〃
〃	北海道国民理科学習帳	北海出版社
17	よみかた4	文　部　省
〃	初等科算数1、2	〃
〃	国民学校職業指導教科書　第1学年　第2学年	大日本職業指導協会
〃	尋常小学地理書　巻2	文　部　省
〃	高等1学地理書　巻1	〃
〃	初等科理科1	〃
〃	初等科修身1	〃
〃	〃　習字2	〃
〃	〃　工作2	〃
〃	〃　算数3	〃
18	初等科国語8	〃
〃	〃　算数4、5	〃
〃	〃　理科3	〃
〃	〃　習字4	〃
〃	〃　工作3	〃
19	初等科算数8	〃

（提供　安藤武雄）

（発行者）

発行年代	書　　名	発　　行
大正　2	通俗畜産大観	帝国畜産奨励会
6	北海道農業教科書	北海道教育会
8	大日本地図	東京雄文館
10	新編漢文読本巻1、2、4	明治書院
〃	中等歴史教科書〝日本史〟	六盟社
12	大正国語読本巻3、4、5、6	育英書院
〃	石川生理衛生教科書	富山房

発行年代	書　　名	発　　行
大正　13	尋常小学地理書附図	文部省
14	新撰国語読本　巻5、6、7、8	明治書院
〃	日本文法教本	東京開成館
〃	新地理外国　上巻、中巻	文学社
〃	新制化学教科書　上巻	東京開成館
〃	〃　鉱物教科書	〃
〃	改訂博物通論新教科書	星野書店
15	統一日本史　上級用	六盟館
〃	世界地理　下巻	東京開成館
〃	尋常小学算術書第3学年用	文部省
〃	新修漢文　巻5	明治書院
昭和　2	大正物理学教科書　上、下巻	内田老鶴圃
〃	農業気象学教科書	東京開成館
〃	高等小学読本　巻1（農村用）	文部省
〃	尋常小学算術書　第4学年	〃
3	西洋歴史精図	帝国書院
〃	最新園芸教科書　蔬菜編	富山房
〃	新撰国語読　本巻9、10	明治書院
〃	中学修身書　巻3、4、5	中文館
4	新制地理学通論	東京開成館
〃	上代歌文新抄	中興館
〃	新制化学教科書下巻	東京開成館
5	英語基礎単語4000	タイムス出版社
〃	物理学教科書　農業学校用	中等教科書出版
6	果樹園芸教科書	文盟館
〃	中等教育鉱物果新教科書	〃
〃	改訂畜産学教科書汎論	明文堂
7	尋常小学唱歌　第4学年用	文部省
8	高等小学修身書　児童用　巻1	〃
10	高等小学図画　第1学年女児用	〃
〃	尋常小学理科書第　第4学年用	〃
〃	小学国語読本　巻5　尋常科用	〃
〃	高等小学読本　巻2　農村用	〃
11	小学書方手本　第4学年上・下	〃

発行年代	書　　名	発　　行
昭和 11	小学国語読本　巻7	文　部　省
12	尋常小学修身書　巻4	〃
〃	〃　算術　第3学年上	〃
13	〃　〃　第4学年上	〃
〃	小学国語読本　巻8	〃
〃	模範大全科学習書　尋常第4年前期	学　習　社

（執筆・沢　四郎・写真・佐藤照雄）

参考文献

(1) 阿寒町史編纂委員会　阿寒町史　昭和41年。

(2) 北海道教育庁　北海道開拓記念物概要第一部　昭和42年。

(3) 北海道教育庁　北海道開拓記念物概要第二部　昭和43年。

(4) 民俗学研究所編　民谷学辞典　昭和43年。

(5) 中村雄三　図説日本木工具史　昭和43年。

(6) 文化庁文化財保護部監修　日本民族資料事典　昭和44年。

《阿寒町産業史概説》

開拓期に於ける

阿寒地方の木材切り出しと農作物つくり

1　小稿のねらい

阿寒地方の地図を開いて見よう。現在、阿寒町を北から南へ国道２４０号線（マリモ国道）が縦断し太い動脈の様に走つている。そのアスファルトの国道ぞいに、阿寒川が阿寒湖から流れ出し、左右に折曲しながら、徹別川、舌辛川など多くの支流を集め、大楽毛で太平洋に注いでいる。この川が下流で南へ大きく折れ大楽毛で海に注いでいる現在のこの地帯の河道は大正大洪水で、水量を急増した川の力で一気に大楽毛川へ、流れ込み河道を変えたのである。それまでこの川はこの地点でもうねうねと蛇行し、釧路川の下流へ流れ込んでいたのである。この川口を人々は阿寒太（あかんぶと）と呼んでいた。ここは後述する通り、漁業や林業の面でも大切な役目を果して来た所なのである。

さて、今日の様な立派な道路がない時代にはこの阿寒川が重要な道路の役割や物資の運搬と云う仕事も引受けて来たのである。この阿寒地方へ入殖した者や仕事に来た者達は、川べりの細道や丘陵の上を通つていた細道も利用したが、道は極めて悪かつた。そこで、日常品の運搬やこの地方でとれる産物は川舟で運ばれたり、木材の様なものは直接、川を流送したものである。だからこの川は、この地方開発の上から見ても大切な「母なる川」であり、開拓初期には「命の川」ともなつたものであつた。

今、こゝで問題にし、多少整理したいのは明治、大正期の開拓期に於ける産業史の面で、入植によつて数多くの先人達が試み、失敗や成功を繰返して来た農作物つくり（農業）と、もともとこの地方にあつた豊富な木材の切り出し（林業）の姿を追跡する事である。この地方の人々にとつて、農業と造材仕事（林業）とは不可分な関係にあり、生活に深くかかわり合つていたのである。

農業を論みこゝへ入植した人々が、悪い自然条件と戦い、冷水害になやまされながら、生活して来る事が出来たのは、農閑期にこの阿寒川流域林を切り出す造林現場で働らく事で得た現金収入（日銭かせぎ）が大きな生活のささえとなつていたからである。中には遂に本来の農業をめざした人々の中から造材、運搬作業を専門とする業の人達さえも沢山でた程である。

従つてこの地方の開拓期の産業史を具現するためには農産物つくりと造材、木材運搬作業の様子、そこで生きた人々の姿を吟味する事から始めなければならない。またこゝでとりあげるこれらの対象とする時期は明治３０年代以降、大正期までであるが、ものによつては昭和初期まで及んでいるものさえある。

本町には開拓初期からの様子を伝えるすばらしい『阿寒町史』がある。それに、どれだけこの小稿が接近出来たか、また『町史』の産業項目別に分化しすぎた難点をどれだけ一体的にま

とめ克服出来たかは極めて疑問ではある。この点について大方の御批判、御指摘をお願いし、ささやかな本稿を展開する事にしよう。

2　失敗に終つたアイヌ移住計画

明治１７年に「根室県管内旧土人救済法」がひかれアイヌに対する勧農政策がようやく歩み出した。翌１８年、釧路村のモリシヤ（一部春採も含む）方面に住んでいたアイヌ２７戸＝１５０人程＝を雪裡川の沿岸に移住し、１戸平均1,５００坪のわずかな畑と農具や種子、更に各戸に馬１頭をあたえ、農業に従事させようとした。アイヌが移住した翌年と２１年は鮭がこの川をそ上し大漁になり、アイヌ達はなんとか生活できた。しかし、明治２６年にはこの雪裡川に鮭の天然孵化場が釧路漁業組合の出願で出来てしまつた。それで和人の漁師達は釧路川口附近で川一杯に網をはりめぐらす留網で鮭をとつたので、上流には鮭はあまりのぼらなかつた。従つてアイヌ達は農作物つくりが最初から不十分であり、この鮭にたよる生活であつたから、途端に食料に困まつた。またせつかくこの雪裡川にのぼつた鮭も５月から１１月までは禁漁で番人を張込ませたので、アイヌ達はどうする事も出来なかつた。そこでアイヌ達は食料を求めて再び、釧路の春採へ逆もどりしなければならなかつた。明治３０年代初頭にはこの雪裡に13戸と舌辛に６戸、合計１９戸が残存しているに過ぎないと「北海道殖民状況報文」は伝えている。[1] つまりこの雪裡へのアイヌ移住は食料不足による死亡と再移転で半数ほどしかふみとどまらず、完全な失敗に終つたのである。

なぜこの雪裡へのアイヌ移住を最初にとりあげたかと云うと、現在の阿寒町のもとをなしていた明治、大正期（一部）の名称は「舌辛村外３村」で、今、あげた雪裡もこの中に入つていたからである。この舌辛村外３村には阿寒川流域を中心に、舌辛村、徹別村、蘇牛村、飽別村の４村からなつていた。それでこの４村への最初の移住が、アイヌでありあまりにも無計画な勧農政策であり、無残な姿で失敗に終つたからなのである。

そして、明治２０年代末、３０年代初頭にこの阿寒川流域へ入殖した和人達もこれ程悲惨な姿ではなかつたにしろ、同様の苦労を強いられたのである。

3　木を焼くことから始まつた開拓

明治３０年代初頭になつても阿寒地方は寒冷帯の大密林の中を多くの支流を集め、一筋の太い川がうねうねとぬつて流れる辺境の地であり、原始のまゝの秘境の部分さえ、そつくり残つていた所もあつた。この様なところへパイオニア達は阿寒川づたいに、開墾の鍬をふるうため入殖して来たのである。この地方の土地区画は明治２８年に実施されていたが、入殖者がここへ入つて来たのはその２年後の明治３０年からである。

入殖者達は阿寒川べりの舌辛方面の選定された土地まで内地からやつて来た。そしてまず風雪をしのぐ仮小屋をつくり、落ち着く間もなく、開墾に励まなければならなかつた。定められた土地の立木を鋸やマサカリで切り倒す作業に来る日も、来る日も明け暮れたのである。この開墾作業のはじめは北海道のどの内陸地方の開墾にも見られた様にこの立木の処理がここでも実にやつかいであつた。だから入殖達がなんとか切り倒した木は火をつけあたりがまる裸になるまで焼きつくしたのである。舌辛村へ入殖した安藤利右衛門さん等が木をやく煙は天をこがす様にたちのぼつた。そしてこの煙はあたりの密林に何筋かの糸の様に各地で見られ出した。

それは富山県新川郡出身の武隈作平にひきいられた「富山団体」で４３戸２８０人余の人達であつた。みな舌辛原野へ入つたのである。

更に翌、３１年には新潟県や高知県からも移民が入つて来て開墾の火は更に広まつた。

一面まる裸に焼きつくした土地にはおもに蕎や、稲黍（いなきび）、ジャガイモをまき、土地によつては大豆、小豆もうえ、秋にはなんとか収穫をした。[2]家族数によつて異なるが、はえている立木のため、１年で３反から５反程度の開墾しか出来なかつた。浜田幸長さん（下舌辛）の父は明治３１年高知県より入殖したが、「この辺はガスがたちこめ、むこうまで見えない日が夏に毎日続いた。畑に出ても、「うんか」が多くてどうにも仕事にならなかつた。そこで昼でも腰に火縄をともしながら仕事をしたものだ」と当時をふりかえる。

４　未開地処分法と牧場ブーム

舌辛原野に富山団体が入殖した明治３０年には、日清戦争後の企業熱による農場経営の発展に対して法的基礎を与えようとして「北海道国有未開地処分法」が出されたのである。この法によつて未開の国有地を出願者ひとりにつき、開墾の場合には１５０万坪、牧場として払下げを受ける場合には２５０万坪まで、更に会社や組合組織の企業に対してはこの制限の２倍まで貸付け出来る事になつた。しかも貸付地は２０年間地租や地方税が免ぜられたのである。[3]

こんな結構な話はない。従つて土地にむらがる人達が発生するものは当然の事であり、出願者は多くの場合、１番条件が有利な牧場としてこの未開の国有地を払下げて行つたのである。[4]

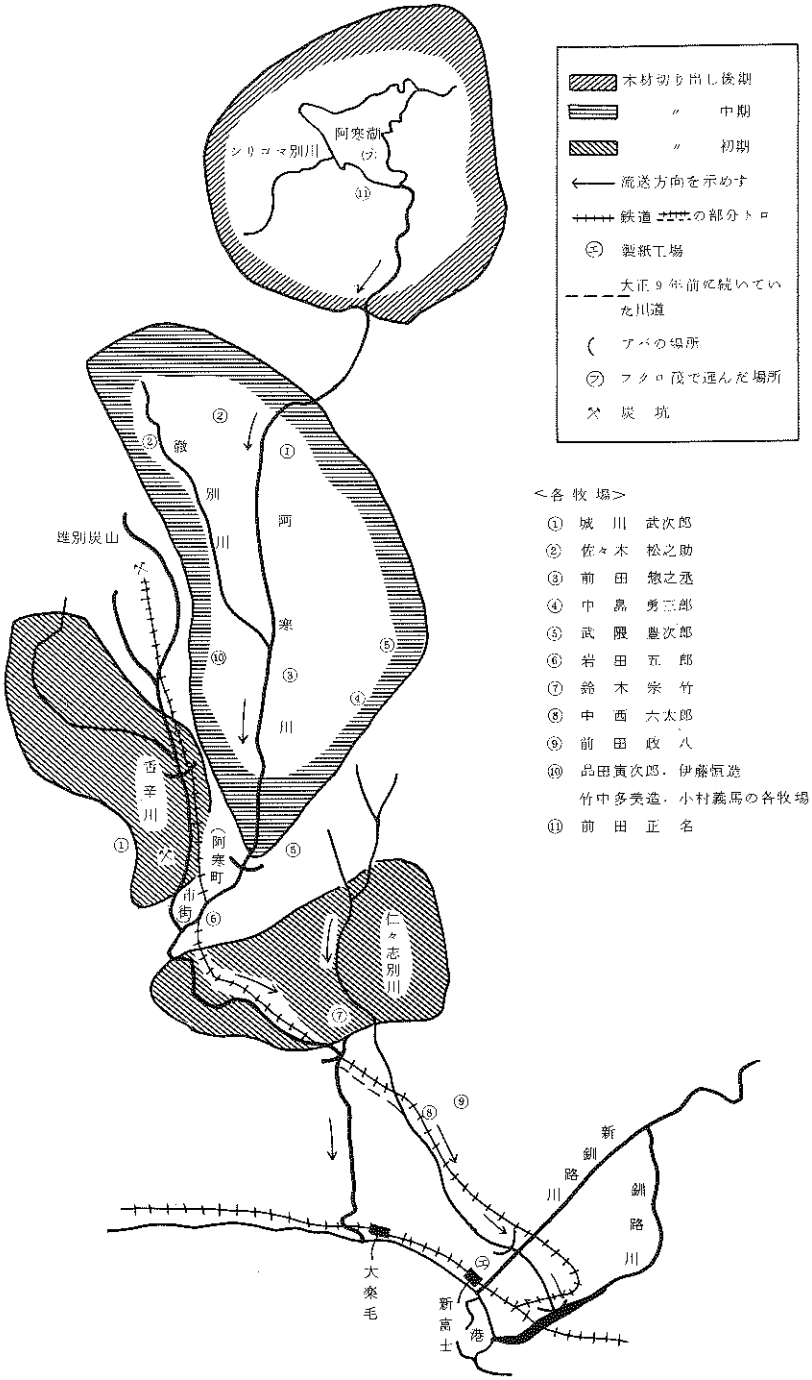
明治３０年代の釧路地方の未開国有地は４０２,６４３万町歩あり、その内阿寒川流域地一帯の阿寒郡には９０.７０９万町歩、釧路川中、上流域一帯を含む川上郡が８９,５６０万町歩、茶路川流域林を主とする白糠郡は８１,６４３万町歩と云う状態であり、阿寒郡の未開地が一番多くあつたのである。[5]だからこれらの土地は釧路国の外の地方同様に阿寒の場合も出願者は、一番多く土地を払下げ出来た「牧場」名儀でまず阿寒川べりの土地が払下げられ、第１図の様な牧場が各地に出来て行つたのである。

この阿寒川流域に発生した牧場は、牧場そのものとしての利用よりも、その山林にはえている原始林そのものの切り出しが大きな魅力でありそれが目当てであつた。こゝには大自然のまゝの豊富なトド松、エゾ松の大木が密生しているばかりでなく楢原（ならわら）と云われる太い楢の密林も繁茂していたのである。だから、外の地方や内地からやつて来た造材師達によつて、払下げ地の太い立木を切り出して行くのは時間の問題であつたと云えるのである。

すでに明治３０年代初頭にはホロロ川や舌辛川べりの白楊材を切り出し、川を利用し、釧路へ流送したし、仁々志別川及び阿寒川下流の払下げ地のナラ材は鉄道枕木用として、立木のまゝ１本１０銭で売り払われ、この地へ入つたパイオニア達の冬の農閑期作業として切り出され専門の木挽も入つて、枕木に仕上げ流送仕達が阿寒川を筏にしてそれを釧路まで運ぶ様にもなつた。一方舌辛川西方山林からはトド松材を角材にして、釧路へ散流（ばらながし）する様になつた。[6]従つて、アイヌも和人の入殖者も冬の伐木作業や切つた木材運搬に馬の持つている者はそれをひいて出かけ、日銭を得てそれを生活資金にあてたのである。この林業に関する仕事は冬期間ばかりでなく、人によつては夏場の阿寒川の木材流送にも雇われたりもしたのである。これは入殖者達が自分に割当てられた土地の立木を焼払つて耕地にする夏場の作業と対称

第１図　阿寒川流域の木材切出し

（明治末期～昭和初期）



的な作業であつた。しかし、この対象的な冬の作業が、なかつたならば、この地方の人々は生活出来なかつたのは明らかな事である。

それもそのはずで、明治３０年代末の舌辛村３村の１年間の作物収穫量は、稲黍が最高で、1,００２石、次が菜豆の６４８石、次がトウモロコシで６００石程でしかなく、この外にジャガイモをつくり、[7] みな米代わりの主食にしたのである。つまりこの時期にはとれた農産物だけで生活出来る状態ではなかつた。みな冬の造材作業で得た金や米で日常生活必需品を買つたのである。１冬働らいても十分に必要な物を買えなかつた金高ではあるが……。

5　成功検査と「かぼちや」つくり

さて、この様な地へ、入殖者がどんどん増えて行つたのである。第１表は明治４３年現在のこの地方の原野別総面積、処分面積、移住農民数（戸、人口）を示めしたものである。釧路国全体の殖民区画地の面積は５６,０３３町歩で、阿寒川流域地を主とする阿寒郡が全体の３５パーセントほどになつていて、釧路国の内では最多地域ではあつた。しかしこの中でも明治３０年代初頭にすでに団体入殖が見られ、比較的地味のこえていた舌辛原野はすでに1,６２１町の土地が処分され、２９３戸、1,０５４人の入殖があるものの、実際の耕地にした面積は処分面積が5,３５７町歩であつたのに対し、第２表の通り、阿寒郡全体で3,１１８町１反でしかなく、その作業は困難を極めた事がうかがえるのである。つまり、明治４３年現在で全体として3,１１８町１反のうち既こん地は2,０７１町７反でしかなく、あとの1,０４６町４反は新こん地と云う結果から見ても４０年代に入つてようやく開こん作業が牛歩ながら進んで来た事を物語るものと見て良かろう。生活がなんとか落着いて

第１表　　殖民区画地（明治43年）

＜阿寒地方＞

殖民区画地名	総面積	処分面積	移住農民		区画年次	貸付許可年次
			(戸)	(人口)		
舌辛原野	2,366(町)5900	1,621(町)8410	293	1,054	明治28年	明治29年
舌辛増区(一)	363,8811	296,9018	20	76	−	−
舌辛増区(二)	791.7601	682,0728	27	84	−	−
徹別原野	2,709,6411	920,3825	87	345	明治28年	明治29年
徹別増区	113,7121	30.101	3	11	−	−
飽別原野	191,3001	89,1420	2	5	−	−
仁々志別原野	2,755,2326	564,9002	8	48	明治28年	明治28年
雲裡原野	1,561,4416	311,1305	26	97	〃	〃
ホロロ原野	3,412,4702	267.1318	13	50	〃	〃
クチョロ原野	3,085,5715	574,1303	22	104	〃	〃
クチョロブト原野	2,228,2424	−	−	−	〃	〃
阿寒合計	19,559,8708	5,357,9710	501	1,874	−	−
釧路国合計	56,033,4327	21,069,5718	1,929	8,026	−	−

本図は古川史郎氏作製による（「新釧路市史会報１１号」ｐ４～５）

第２表　舌辛村外３村の耕地面積

（明治４３年）

単位（反）

既墾地		新墾地		計
自作	小作	自作	小作	
15590	5127	6354	4110	31181

（『釧路国勢１班』Ｐ５５）

第３表　舌辛村外３村の農業戸数及び人口

（明治４３年）

専業		兼業		計	
戸数	人口	戸数	人口	戸数	人口
366	1477	92	489	458	1966

（『釧路国勢１班』Ｐ５６）

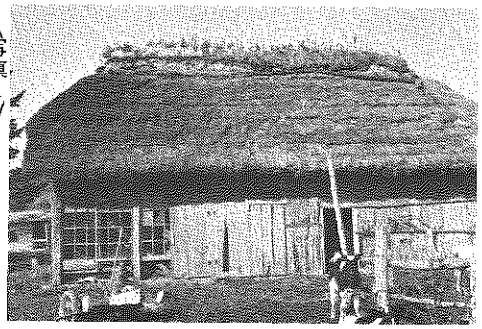
来ると、粗末な小屋から、わら屋の家（板さくり）に建てかえて行つた。＜写真 1. 7. 8. 9＞

また同じく、明治４３年の農業の業態資料を第３表としてかかげたが、専業農家３６６戸、1,４７７人、兼業農家９２戸、４８９人であるが、今日で云う完全専業農家と云うのではなく造材（林業）作業との兼業で相当生活した者がいた事も認めねばならないであろう。この時期の作物としては大麦、裸麦、小麦などが麦類の大半を占め、自家用味噌などにあてた。＜写真４＞　大豆もつくり作物として小豆の外、造林地で使用する馬の食料としてエン麦の栽培も行なわれたが、量は多くない。自家用の食料としては稲黍やジャガイモ、とうもろこしを作つている程度に過ぎない。

しかし、入殖者達には１０年後にひとり当り５町から１０町のひらいた土地についての成功検査がまつていた。そして、もし割当てられた土地の内未開墾地があつた場合は全部返還させられる時もあつた。だから成功検査に役人が来ても「いかにも土地が畑として成功しているかの様にするのに農民達は苦労した。」「それで荒おこしの土地にカボチヤを播いた。カボチヤはつるがどんどんのび、葉も大きく、如何にも畑になつている様に見えたからだ。」[8] と云う山崎定次郎氏談が『阿寒町史』の中にあるが、これは農民達が土地をうばわれまいとする苦肉の自営手段としてあみ出した最良の方法であつたわけだ。富山県新川郡より武隈農場に明治30年に来た滝川さんも大豆、小豆、いなきび、かぼちやなどをつくつたと云う。

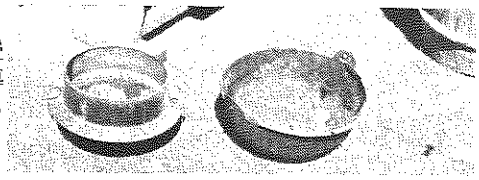
大正時代には和歌山団体、宮城団体、福島団体が相次いで徹別に移住して来たし、明治末期にはやむにやまれない内地人の米つくりへの執念から明治３９年富士製紙の請負でこの地へ来た造材師・城川竹次郎（富山県人）は現在の沼館牧場の所で米つくりに成功した。これがひとつの刺激になり、阿寒町では畑作と比較するとその量では問題にならないものではあるが、米つくりもこの地方独特の方法で次第に各地へ広がつて行つた。とれた米は農家の自家用米にしたり、一部はこの地方へやつて来ていた造材飯場の料米にも使われた時もあつた。

浜田幸長さんの父も昭和の初期には沼館牧場の所で米つくりをやつたと云う。また滝川弥一さんも大正末期から昭和初期にかけて、１町５反程の米つくりをウエン別川流域でやつた。結構、米はとれたが、みな自家にして食べたのであるが、洪水がおこり、水田はすつかりだめになつたと、ウエン別川辺の旧家の前で滝川一郎さんは当時を思い出していた。現在、かつての水田は牧草地にすつかり変わつている。



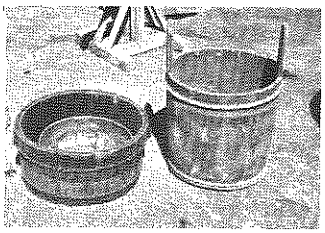
<写真1>

↑開拓小屋から1歩進んだワラ屋根の家（現在は物置）　＜下舌辛＞



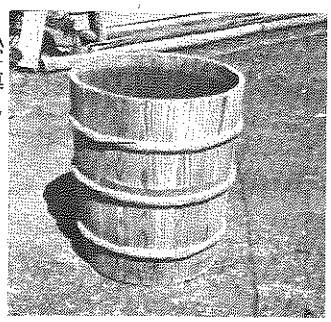
<写真2>

↑富山から持つて来たカマとなべ　＜下舌辛滝川一郎宅＞



<写真3>

←同じく、オケ、くみおけ　＜滝川一郎宅＞

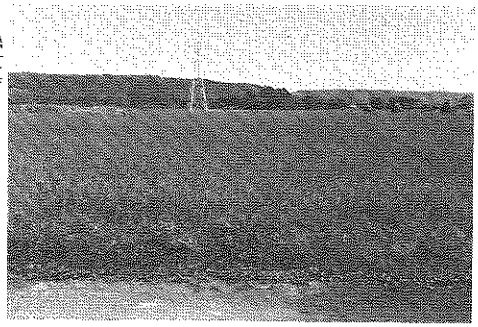


<写真4>

←同じく杉材のみそたる　＜滝川一郎宅＞

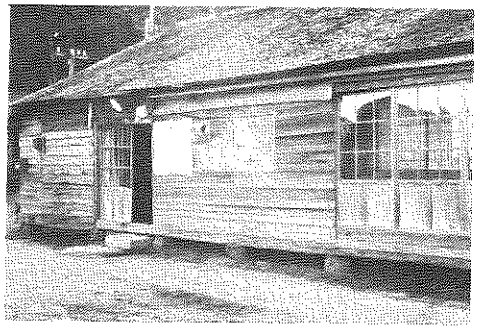
<写真5>

↑　滝川一郎氏と水田用水路あと　＜下舌辛＞



<写真6>

↑かつて水田であつたところ。現在は牧草地　＜下舌辛＞

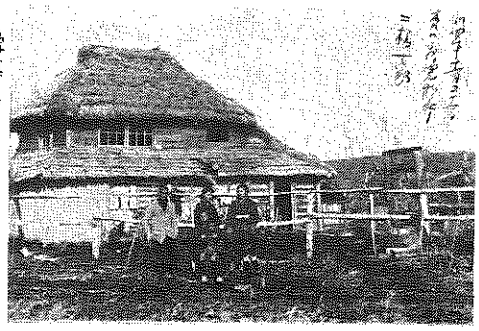


<写真7>

↑ 柾屋根の家（下舌辛・石橋清治宅）

<写真8>

↑昭和初期の開拓農家の家内部。時にはこの様な素丸太も使用されている。



<写真9>

↑わら屋根と板がこいの農家とその家族たち

6 木どころ・舌辛

明治末期の舌辛外3村の林産物高を第4表で見よう。『阿寒町史』でもこの第4表に示めした「釧路国勢一班」を使い丸角材と枕木材を述べているので、それとの重複をさけ別な角度から整理する事にしよう。この表で主な角、丸材及び鉄道枕木材の町村別主産地は釧路、白糠、舌辛がその代表と見て良かろう。その主産地の釧路と白糠間にはすでに明治34年以降、鉄道が通つていた。そして、浦幌まで鉄道が延びて行つた明治36年頃には、白糠、庶路駅は木材積出し駅として脚光をあびて来た。庶路川や茶路川を使い川流域の木材は附近の農民や杣夫によつて切出され、馬で川べりまで運ばれ、川を流送仕達によつて、駅近くの土場まで運んで来て釧路へ貨車輸送されて行つた。その木材ブームにわいた「木どころ」のひとつが、白糠であり、釧路であつた。釧路には釧路川流域の樹林地から切り出された木材を川によつて流送して来た木材と、先にふれた近代的な輸送手段である貨車で運ばれて来た木材の集散地・船積港として、木材ブームが次第に培養されつつあつた。

舌辛方面の丸、角材は阿寒川べりの樹木地から釧路の造材師に指揮されて山頭のもとに入つて来た杣夫や附近の農家の人達によつて冬期に伐木され、馬を使い、玉や玉ぞりで川べの集材所まで運ばれた。そこで刻印を打ち（写真10）阿寒川流域の各支流や枝川では春の増水を待ち、九州日田方面から出稼に来ていた流送仕達によつて、小川をせきとめ、堤を築きそれに木材を一杯に落し、水力を利用して、一気に堤を開らき、木材を下流へ流送仕達が散流したのである。（写真12）これらの流送によつて釧路へ運ばれて来た丸、角材は、釧路や白糠よりも多く、金額にして93,264円で釧路国全体の丸、角材の金額226,710円の41.1パーセントを占めている。一方、鉄道枕木材はおもにナラ材で造成されたが、阿寒川流域での鉄道枕木搬出は、造材場で規定の寸法に仕上げられ、それを本流まで、堤（鉄砲落し）で運び入れ、そこで筏に組んで流送仕がそれに乗り込み、釧路まで運んだのである。この枕木材は沈みが多いので、浮木代りに松材などの軽い材をはさみ、ともづりにして筏に仕上げたのである。また本流まで遠い場合は夏は馬車でそこまで運び筏にしたのである。（写真11）筏に仕上げる場所や散流をする場所はワイヤーが張られ木材を集めやすくした。そこを網場（アバ）と云うが、この網場は阿寒川の川口・阿寒太にもあり、そこで木材を整理し、釧路港へ更に運んで行くか、土場にあげ水きりをするかものによつていろいろ決められた。枕木材の流送による運搬は貨車輸送より手間がかかり大変であつた。従つて4表に示している様に白糠方面の貨車輸送による方が便利で採算も合つたので、55,350円で釧路全体の40パーセント強になり、次が釧路で47,500円で35パーセント、舌辛方面は22,050円で16.2パーセントでしかない。

しかし、丸、角材量及び枕木の量を見るとやはり舌辛方面でも木材ブームが発生したの気付くのである。大正初期にはぼう大な木材が流送によつて釧路へ運ばれて来た。今、大正3年の阿寒川による流送木材量は335,587石に達し、みな釧路へ運び込まれて来た。その年の釧路川による木材流送量は127,700名でしかなく、阿寒川の方が釧路川により3倍近い木材量になつている。また同年の釧路国全体の木材流送量は721,040名であるので阿寒川のその量は全体の46.5パーセントを占めるまでになつている。[9)]

明治末期同様、この川の木材流送は松材など

第４表　明治末期の林産物量及び金額高表

行政区画	丸及角材（尺メ）	鉄道枕木（挺）	木　炭（貫）
釧　路　村	22,066 31,996 円	95000 47,500 円	749000 29,960 円
厚　岸　村	12,000 14400	25000 10000	126000 2,394
浜　中　村	5100 5355	－ －	99800 4.990
白糠外２村	60,625 57,938	135000 55,350	250,000 7,500
足寄外３村	1,585 1,437	3200 800	4200 210
熊牛外２村	13,224 17,191	－ －	13.600 544
弟子屈外1村	12000 1020	－ －	2,500 150
舌辛外３村	77,720 93264	73500 22,050	6,132 245
鳥　取　村	－ －	－ －	6,000 180
昆布森外2村	5000 3500	－ －	16,000 480
大　田　村	500 600	－ －	120960 4.234
計	209820 226,701 円	331,700 135,700 円	1,394192 50,887 円

（本表は「釧路国勢－班」P80～81）

は散流し、枕木などは筏にし、みな釧路へ運んで来た事には変わりない。この時期には阿寒川沿岸にすでに土場は全部で７もあつたと言われている。

7　木材ブームの背景

この阿寒川流域林からの木材切り出しを含めた釧路地方の木材の活況は、明治末期から大正期をむかえ、ただ単に「木どころ」となり木材ブームが発生したわけではなかろう。そこには日本的、北海道的な木材資源量の変化と木材需要増の関係がその背後にあるのです。それらの事情を多少こゝで見ておこう。

北海道では明治３３年以降、天塩川流域林地でこの川による本格的な木材流送が行なわれ、その流域にある天塩松の豊富な蓄積と流送に適した川の流れや河口に於ける沿岸積取りの便利さなどによつて、３０年代後半から４０年代にかけて天塩材時代と云われる程のブームをつくつた。これは天塩川流域を中心とする植民地から出されたもので、移、植民地材とか、農牧場地材と呼ばれ、北海道材のひとつのピークをつくつている。[10] やがて天塩川流域林地の木材を切りつくし、その中心地が胆振地方に移つた。従つた室蘭港が木材積み出しの中心になつて行つた。こゝも木材資源の底をつき出した明治４０年代から大正期一杯にかけて釧路地方（北見十勝を含む）が枕木材などの木材搬出の中心地になつて来たのである。

阿寒川や釧路川更に白糠、浦幌方面から釧路へ運び込まれた木材は、釧路港から船積みされて行つた。第５表は大正３年に於ける釧路港からの木材輸移出量である。Ⓐ外国輸出量は７９５,１８３石で国内移出の５１９,５４０石より、１.５３倍も多く大部分は輸出鉄道枕木として釧路港より船積みされて行つた。その内中国の漢口へは２７６,９１８石出しており輸出全体の３４.８パーセントに達し、次が大沽で１３９,０７７石、１７.５パーセントであつた。Ⓑの移出木材を見ると、名古屋が１４６,２４８石で２８.１パーセント、清水が５２,０５１石で２９.３パーセントになつている。これら船積みされた木材の内根室線、網走線による木材の貨車輸送量も大きいが前にふれた阿寒川による木材流送も見のがしてはならない主要な林産地のひとつだつたのである。

第５表　釧路港より輸移出木材量（大正３年）

Ⓐ 外国輸出

仕向地	数量（石）	仕向地	数量（石）
上　海	94,347	南　京	20810
青　島	28002	秦皇島	12813
大　連	98442	九　江	7,500
漢　口	276,918	夏　門	3,750
浦　口	15,531	ポートランド	16500
香　港	14542	シヤートル	1,500
ポートセツト	7,967	倫　敦	1454
カルカツタ	9,323	ロツテルダム	9004
シドニー	11,710	仁　川	16033
清　津	9960	計	795,183
大　沽	139,077		

Ⓑ 内国移出数量

仕向地	数量(石)	仕向地	数量(石)
東京	64285	熱田	29075
横浜	3,677	四日市	8475
兵庫	97,664	清水	152,051
大阪	3400	青森	2,414
名古屋	146248	函館	8,634
若松	871	その他	1,137
室蘭	1,509	計	519540

(殖民公報第85号雑録P52)

8 ブームと出稼造材士たち

この木材ブームの波にのつてこの阿寒川流域林へはますます多く造材師の要請で山頭や流送師にひきいられた多数の杣夫や流送夫がはいり込んで来た。これら出稼人と相まつて、地元の人達もこの造材、運材などの仕事に多様な形で参加する様になつた。従つてその様子を見る事にしよう。

㋑大塚木材と舌辛。

大塚仙五郎(明治9年生)は明治35年徳島県から天塩の士別に来て、木材業の仕事に入つた。明治39年三井物産の出張員として釧路へやつて来た。

親しかつた坂本弥太郎氏が独立したので、三井から坂本さんの仕事を手伝う様になり、阿寒川流域の木材切り出しにも来たのである。

やがて独立して、鉄道枕木や、富士製紙への原料材を専門に運び出し、[11]造材業の地を固めたのである。この大塚木材には当時活躍した米田三左衛門(明治20年生・宮城県出身)もいた。もともと大塚木材は三井物産の下請的仕事をしていたので、米田さんもはじめ、三井物産に18才で入社し、大塚さん所へ来たひとりである。米田さん等は最初、音別川、茶路川、庶路川の流送を主な仕事としていたがやがて阿寒川中流の造材もはじめた、と云う。[12]この仕事には阿寒の八幡幸一さん等も木材流送のため大正6年に大分県日田から、流送夫を30名余つれて参加している。

㋺佐々木造材部と徹別

明治の末期から富士製紙の木材流送を一手にひき受けていたのが佐々木松之助氏である。大正7・8年にはこの造材現場が阿寒川の支流である徹別川のほとりにあつた。この造材場へ夫婦そろつて、鍛冶屋として出稼に来た岩波幸作氏(明治25年生)の話に耳をかたむけてみよう。

私は大正7年の春、雪どけと同時に、家内(はな)をつれ造材現場で使う、チンチヨウ、トビサキ、ドツトコトビ、チンの修理や流送に使うかんやねこかんをつくる鍛冶仕事のため出かけた。この㊙の作業場は徹別川の流域にあり、上の方から杣夫の飯場、㊙の事務所、馬追い飯場と三つの飯場があつた。これら飯場の食料は当時上徹別で駅ていをしていた野沢定太郎さんの所に釧路から米噌や馬糧を運びあげ、そこから馬の駄馬でこゝへ持つて来たのです。

杣夫の飯場には赤沢と云う山頭がいて、彼により北見や津軽から杣夫が40人ほど集められていた。これら杣夫が木を切る時には鋸で太い立木を切るが、「矢」と云われたくさびを打ちながら、鋸がしぶくならない様にしたのです。この立木を杣夫が思う様に切り倒すためにはマサカリやサツテキでうら切りをしていたので、自分の思うまゝ倒したものだつた。

切り倒した木材を運ぶため、馬追い飯場附近には馬小屋があり、それに25・6頭の馬がいて、㊙の馬も4・5頭いた。これらはみな簀出しや流送する集材所まで木材を運ぶために使われた。㊙の馬は月15円から20円ほどで馬を持つていない者には貸出しもしていた。1日に1頭曳きによる(玉びき)木材運搬量は12尺ものの材30石ほどを大体運んだのである。まだこゝではバチは使用していなかつた。使わ

れた馬は主にペルシユロン系の大きい馬が大部分であつた。岩波さんは鍛冶仕事がひまになると、簸出しの仕事もしたと云う。それも良い材は先に馬追い達が運んでしまうので、「残さらい」ばかりで「ラツパ」と専業の人が呼んでいる切口の小さい材ばかりを運ばなければならなかつた。これは寸どりの場合、「小さい方」で計られるので部どまりが悪かつた。この木材運搬中には6回ほど、熊に会つている。おつかないのでその度につい大声を出したと云う。

この造材場には簸出し人夫は全部で12・3人いたが、流送の仕事も一部かねている人も相当いた。しかし、専門の流送夫は九州や阜岐県からやつて来たひとの方が多かつた。この流送夫達は雪や雨の日にミノを着て、ツマゴをはき、赤線の入つたハンテンを着込んで、テツカインをはいていた。彼等はこの川に3つほど堤をもうけて、たまつた川水を利用して一気に木材を下流へ流す「鉄砲おとし」で運んだのである。そこで働らく人達は2間ほどの竹竿のついたトビを使いながらこの徹別川から阿寒川を流送し、釧路の阿寒太へ運んで来たのである。みなトド松などの青木で富士製紙に入れた。

この杣夫飯場には高橋と云う夫婦者が御飯たきをしていたが、杣夫の弁当は一升めしを上と下こんがり焼いたにぎりめしにして持たせていたと云う。だから毎日事務所に1俵ずつ米をとりに来たものだつた。（岩波さん等は事務所で生活していた）また、下の馬追い飯場でもきつい木材運搬仕事に毎日馬を使うため、1頭で2日に俵のエンバクを食べさせなければ仕事にならず馬方が毎日エンバク俵をとりに来たものだつた。

毎夜、事務所ではランプのあかりの下で、受入れ人の計算する勘定書を見に杣夫や馬追い達が集まり、「オレは今日なんぼ働らいた」とその日の仕事量をたしかめ合うのが日課でこれが楽しみでもあつた。時には一升マスで酒のかけごとをやりさわいだと云うが、それが唯一のたのしみであつたかも知れない。こゝの山は岩波さんが来てから一年ほどで良い材がなくなつたので、大正8年には徹別をひきあげた。[13]

この人達は大正9年の大洪水は従つて知らない。

地元に住む石橋清治さん（下舌辛）の談では父、清次郎が明治31年富山県からこゝへ来てから生まれたが、小学校を出ると、禅寺の奥にあつた大江松之助さんが経営する沢口炭坑に石炭の運搬の仕事をしに一時行つた。これは大楽毛までトロを運ぶ作業だつた。また今、あげた㊙佐々木の造材現場でも日銭を得るため働らいた。20才頃には大塚木材にいた米田三左衛門さんの関係する仕事を一生懸命やつた。この仕事は下雪裡にいた尾屋と云う山頭の下に20人程の杣夫がいたが、そのひとりとして働らいたのである。「大正時代には一時、豆景気で原田商店の豆仲かい人や菊地三之助さん等も馬にのつて私の所に、豆かいに来た」と欧州大戦景気当時のことをふりかえる。40才頃になつてはじめて、プラオを使つたが、それまではみな「手おこし」だつたと、苦しい農作業の一端も話してくれた。[14]

すでに開拓の初期から農作物をつくる一方、造材現場で「うら作」＝農閑期の現金収入を得る方法として＝、働らかなければならなかつたのである。また大城宗平さんの様に明治30年に富山から来たものの、畠がすくなかつたのでおもに造材の仕事や流送仕事で生活しなければならない人達もいた。大城さんの家の近くを流れる川には「網場」があり、そこからかつて散流（ばらながし）したと云う。[15] また尾屋勝治さん（下舌辛）も昭和初期には馬を「使い馬」として持ち、㊙の仕事にでかけ木材は阿寒川か

ら仁々志別川へ入れた。みな富士製紙へ運んだと話してくれた。

㈧藤村木材とシリコマベツ

大正5年㈱佐々木の流送の仕事をやりに藤村敏一氏は和歌山から来た。2年ほどして当時鳥取にいた大塚仙五郎さんの仕事をしたが、この時は木材をおもに名古屋に船で送つた。大正9年の洪水で木材が流れ釧路の木材業者は大変な打手を受けた。大塚さんもこの例外ではなかつた。やがて藤村さんは独立するが、この洪水前に徹別から1万石ほどのトド松、エゾ松などを出した。この木材の流送には「木ばな」に10人、「中のべ」に15人、「木尻」に40人ほどの流送仕がのりこみ、阿寒太の「留」(とめ)まで運び、北海紙料株式会社におさめている。

大正末期から昭和の初期にかけて、阿寒湖のシリコマベツ川流域林の木を1年に10万石ほど切り出し、鉄砲おとしで阿寒湖に入れ、この材をフクロ筏にして、筏の上のロクロを22・3人の者が夜どおしまわし、阿寒川への落口まで運び、2,000石ずつ川を流したのである。[16] 舌辛の高谷木材店も富士製紙の仕事で、このシリコマベツ材をフクロ筏で出している。下舌辛に住む柴木辰三郎さんも大正時代にここへ来たが、農業をやるかたわら、㈱佐々木や高谷木材の造材作業で日銭をかせいでいる。この仕事には各地から専門の流送仕が集つた様で、茶路川を中心に流送した山口春義さんも(明治41年生・白糠郡茶路・大苗在住)藤村さんの仕事で阿寒川本流を散流したり、湖のフクロ筏作業に従事している。釧路市内に住む浜　伝次郎さん(明治15年生)も25才から㈱の仕事で鍛冶仕事に阿寒湖畔に来て、17年間もいた。冬は刃広やトビを修理したり、夏には籔出流送の仕事も手伝つている。

ところで洪水の後は阿寒川も舌辛まで来ると、川の流れもゆるやかになるので、上から流して来た木材は網場を張り、そこで筏にしてから、それに2～3人ずつ乗り組み下へ運んで行つたのである。<写真13>

9 鉄道開通で土場も移動

大正期の本町の林産物を全体的につかめるものとして第6表をかかげた。これは洪水後の大正10年現在のものである。製紙丸太がこの年7万石・金額にして21万円で全体の71パーセントに達している。みな富士製紙へ出したのである。角材は2万5千円余で8.7パーセントであり、鉄道枕木は1万1千余円でずつとすく

第6表　主要林物産価額調(舌辛村3村)

(大正10年)

	区別	数量	価額
八七七一林	製紙丸太	70,000石	210,000円
	早切丸太	2,600	6,920
	角材	7,300	25,750
	鉄道枕木	16,000挺	11,200
	炭材	5,650	16,950
	薪	8,120	24,360

(釧路発達史P596)

なくなつている。この年、北海炭礦鉄道株式会社は阿寒炭田開発のため、雄別炭山まで鉄道敷設工事を開始した。それまでは大正元年に大楽毛から舌辛まで馬車軌道が通つてはいたが、馬鉄が鉄道に変わり出したのである。この工事は難工事をかさねて、ようやく2年後の大正12年に完成した。この鉄道開通によつて川流域の土場も変化し、阿寒川は舌辛附近に「留」をおき、そこで水きりし、土場にあげられ(写真14・15)貨車積みされる様になつた。また舌辛川の場合、コタン駅近くに土場が設けられ、やはり貨車で運ばれて行き始めた。[17] しかし川による木材流送はまだ生きていたし、続いて

行くのである。

10 坂井木材と枕木造材師の関係

今までこの川に関する木材流送の内、おもに製紙用材や丸角材を見て来たので、ここで枕木材について多少整理しておこう。すでに第6表でも示めした如く、この川の場合、鉄道枕木の運搬量は製紙材から見てすくない。その理由は先にあげたので省略するが、ここでは枕木材を中心に木材商と造林師の関係を見る事にする。枕木取扱い専門店であつた坂井木材店は函館のキング氏が死亡する事で、釧路の出張所が大正8年、坂井木材店として再出発したのだつた。

その独立2年目の大正9年、前田政八氏は阿寒川流域林で枕木を造成し、筏にして釧路へ運び三上運送店がその荷さばきを取扱つた。前田はこの年9月から12月にかけて、結局6,669円30銭分の枕木を坂井木材店に売つている。またこの年、舌辛や雪裡で枕木を造成した宮島徳三郎氏は、阿寒川、仁々志別川を運んで釧路へ持つて来て、坂井店へ売るため、三上運送店へあずけている。坂井木材店では鉄道枕木は直接、外地へ輸出したり、国内向けにもしたが木材業者にも転売している。宮島造材師の持ち込んだ枕木材は㊥中西新八や、㊫山口広吉に売渡している。

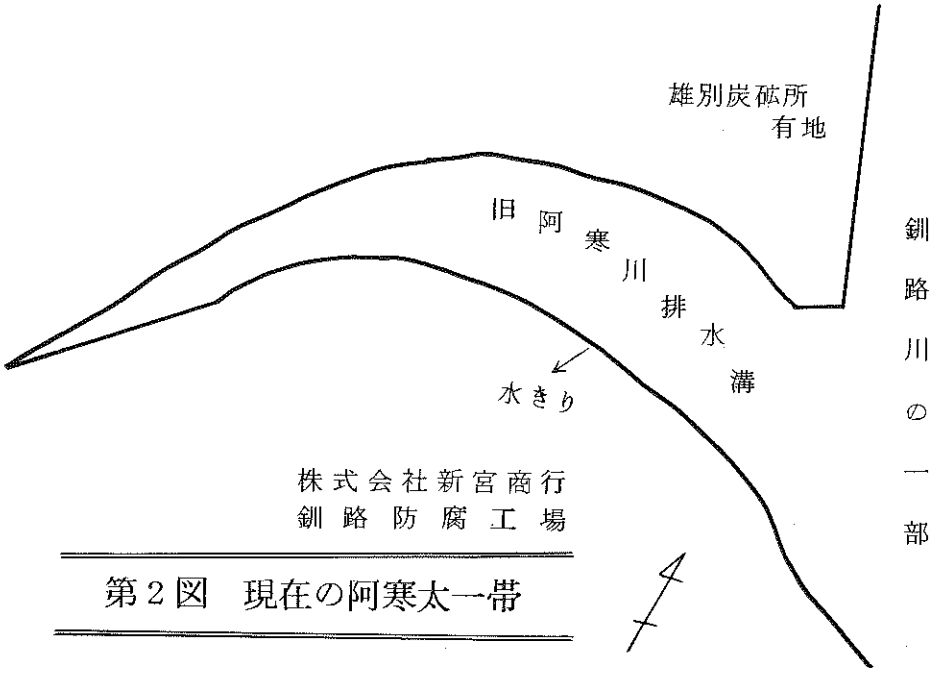
第7表　大正10年舌辛での枕木造成金額高

（佐藤造材師の場合）

5～7月	2518円27銭
8～9月	58円70銭
9～10月	1139円82銭
計	3716円77銭

（坂井木材店「台帳」より作成）

翌10年には仁々志別川、阿歴内などを点々と仕事をした造材師・佐藤藤次郎は舌辛の山でナラ材を切り出し、枕木に造成し、阿寒川を筏流しにして大楽毛へ運び、坂井店へおさめるため平見運送店に管理させている。第7表の通りこれは佐藤造材師がこの年5月から10月まで働



第2図　現在の阿寒太一帯

らいた金3.716円77銭[18] で、彼は坂井店から金を受け取り、配下の流送師や山頭に相応の金額を渡している。坂井店ではこの木材は大楽毛から平見に貨車積させ、釧路の土場へ持つて来ている。

これら枕木にしたナラ材などの運搬には山花に住む米内金太郎さん（明治43年生）も参加した。冬から夏にかけてペルシュロン系の馬で運び、雪裡川を流送したのである。この川も九州日田から来た流送人夫が多く、ナラ材でつくつた枕木などは沈みが多くなるので、浮木をつけ、筏に組んで釧路へ運んだ。はじめこの筏つくりには「かん」など使わずロープで2段かさねにしてあみ、筏に仕上げたのである。大正末期から昭和初期には8間から10間の大きい筏にして阿寒川口まで運んでいたものだと云う。[19] これらの枕木材は先にもふれたが坂井木材店ばかりでなく、多くの木材商が取扱つている。阿寒太（新釧路）にある新官商行 — 防腐工場もその取扱い店のひとつで、旧阿寒川口から水きりをし、土場にあげる様に現在でもしている。（第2図参照）最近（44年10月）この工場から山花の米内さんが話していたロープ組みの枕木筏の写真が発見された。

11 昭和期の造材作業

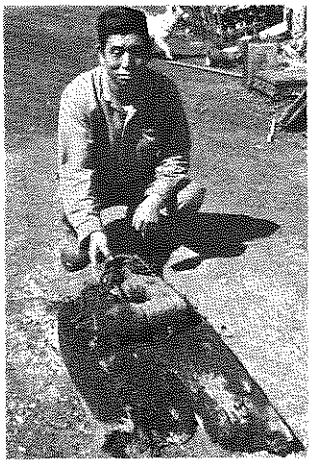
造材師 — 流送師の典型として、昭和期に活躍した。河津繁松さんの場合を見よう。河津さんは大分県の流送仕のまち・日田で明治30年に生まれ、父、安吉さんも山国川の流送仕をしていた。繁松さんは三井物産の木材流送の仕事でほかの流送仕達と釧路へ出かせぎに来ていたがやがて定住する様になり、大正の末に独立した。阿寒川は上徹別にいたかつての駅てい・野沢定太郎に造材の仕事を請負せ、雪裡川の方は鶴居にいた杉村勘次郎さんにその仕事をさせている。[20]

この時期の造材・運材に関する地元民の動向をもうすこし見よう。北斗に在住する種田正雄さんは昭和7年にこゝへ入殖し、大豆・小豆・エン麦・ジャガイモをつくつたが、冬仕事には造材場へ馬を持つて働らきに行つた。また冬ばかりでなく、夏に仁々志別川の流送をやつた時もあり、山花の駅前には網場があつて、こゝで一旦水きりをし、トロで仁々志別川まで運び、再び川で王子製紙のあばまで運んだと云う。[21] 山花に住む大島吉市さん（明治45年生）も農業のかたわらと云うより、年代によつては造材作業が専業の時もあつたと云う程の生活をして来たが、はじめ玉や、玉ぞりで運材し、あとからヨツや、バチバチで木材を運ぶ様になつたと云う。雄別線が出来てからは、阿寒川の木材流送は山花まででおえ、そこで水きりして貨車輸送した場合が多くなつて来たと当時の様子を語つている。[22]

この阿寒川による木材流送は昭和初期にはいると次第に不利な条件がそろい出して来た。それは大正期に富士製紙に電力を送るため設けられた発電所がこの川沿線に増えて来たからである。ひとつひとつ発電所と交渉し、流送師達はその水門を開らいてもらい、「滝おとし」をして下流へ運ばなければならなかつたからである。

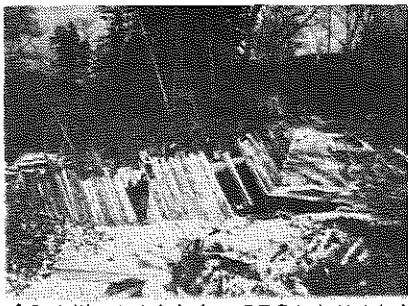
12 伐木後に炭やきさかん

太い立木を切り出した所では炭焼きがどこでもさかんになるものです。すでに第6表で見て通り大正10年には舌辛産の鉄道枕木材より木炭の方が多く、出されていて金額にして1万6千円余になり全林産物中で5.7パーセントになつている。昭和期にはいると、炭やきはますますさかんになつて来た。釧路市の新橋大通りに住む青島清一さんもこゝへ炭焼きに来たそのひとりである。昭和4年陸別で炭焼をしていたの

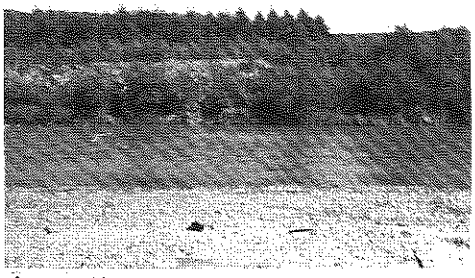


←玉ぞりと柴木さん（下舌辛）

↑造材場から山を馬車運搬し、川まで持つて行く鉄道枕木材

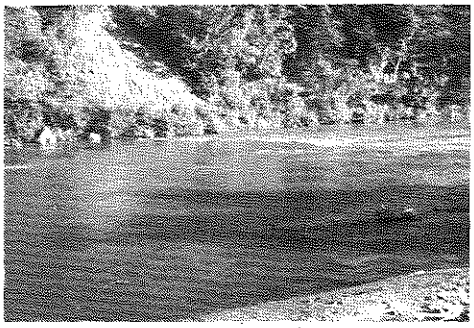


↑阿寒川の上流や各支流で見られた鉄砲おとし（堰）。水をはる前の冬場の風景



↑かつてはこゝにアバがあり筏にして下流へ流した。

↑鉄道がついてからの土場あと。むこうの木の手前を川が流れている



↑鉄道がついてからアバのあつた所（写真１３より上流）

↑阿寒太（阿寒川口）にならべられた枕木元角材。むこうに見えるのが鉄橋（大正中期）

↑写真１５と同じ場所・現在浮いている木はラワン材。

を切りあげ、大楽毛の奥地（高田牧場）とウエン別のふたつ山を買い7年まで父・由松さんの仕事を手伝つた。2間に3間の釜を20枚ほどもうけ、1枚の釜から10貫俵で65俵も炭がとれる大釜で毎日仕事をした。この炭つくりには焼夫が26戸、雑夫、馬持ち運搬人を含め、35戸の世帯で動らいたのである。つくつた炭は俵につめ、ウエン別から大楽毛まで7頭の馬につけた駄鞍に2俵ずつ炭俵をつけ、1日に6回ほどずつ往復した。同じく釧路市内に住む佐々木清作さんも、大正6年に釧路へ来てから製炭業を始め石狩方面から若い衆を呼び集め鶴居方面を焼き歩いている。[23]

阿寒町での炭つくりは昭和20年代まで続いていたが、30年代から需要急減で生産面でも激減現象をおこし、かつての姿はもうない。

13 む す び

この様に見て来るとこの阿寒町へ入つて来た人達は最初みな農業を論んだのであるが、大正期に入つても稲忝とジャガイモをつくりそれを主食代りにし、換金作物としてエン麦、小豆（各全体の12パーセントと6パーセント－大正10年）を栽培する畑作による生活ではどうする事も出来なかつた。確かに米作もやつているが、大正10年の場合で20反まいて、32石の収穫でしかなく[24]一時、大戦による豆などの雑穀景気はあつたにせよ、経営内容が向上する所までは行かなかつた。

この地の人々は勢い、附近の造材場へ動らきに行く様になる。杣夫の仕事や藪出作業に従事し現金収入を得たのである。そして一部の農民達は造材関係の仕事に完全に転業して行つたのである。こゝへ入つて来た先人達にとつて、造材場での仕事は生きるための大切な裏仕事であり、それがなければもつと変わつた姿で今日の「阿寒」は現代をむかえていたはずである。林業の造材一運材の作業はすでに見て来た通り阿寒川によるところが極めて大きい。やはり阿寒川はこの地方開発の「母なる川」であると思えてならないのである。

註1）「北海道殖民状況報文」（明治33年刊）　P96
2）前掲書　P97
3）高倉新一郎著『北海道拓殖史』（昭和21年）　P150～153
4）浅田喬二著『北海道地主制史論』　P46
5）寺島芳太郎編「釧路国便覧」（明治40年）　P47～48
6）前掲「報文」　P98
7）釧路国便覧　P235
8）『阿寒町史』　P286
9）北海道庁林務部所蔵木業統計による
10）『日本産業史大系2・北海道地元篇』　P287～288
11）渡辺源四郎著『釧路の人物』（大正11年刊）　P58～59
12）釧路市昭和41番地在住の米田三左衛門氏談による
13）釧路市幣町4の4岩波幸作氏談による
14）阿寒町舌辛村11線53番地石橋清治氏（明治34年生）談による
15）舌辛村11線61番地大城さん談
16）釧路市・藤村木材株式会社・藤村敏一社長談による
17）『阿寒町史』　P555
18）坂井徳治木材　所有の「台帳」（坂井ヨネ氏提供）
19）釧路市山花14線127番地、米内金太郎氏談による
20）釧路市松浦町在住・河津ナカ氏（明治36年生）談による
21）釧路市北斗75番地在住の種田正雄氏（明治42年生）談による
22）釧路市山花在住の大島吉市氏談による
23）釧路市新橋大通り3番地在住・青島清一氏（明治39年生）談と同じく市内弥生町に在住する佐々木清作氏（明治25年生）談によるもの
24）古川忠一郎著『釧路発達史』　P593～594

（執筆　寺島敏治）